

# 聖徒の道

10  
1990



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会

# 聖徒の道

1990年10月号



## 一般

2

大管長会メッセージ  
たかが教師  
トーマス・S・モンソン

18

夫婦が互いに耳を傾けないとき  
ラリー・K・ランロイス

25

主の側に立つ  
ジョージ・R・ヒルIII

34

パロの国  
リチャード・M・ロムニー

42

旧友  
リチャード・W・カータック

46

私のフライトバッグに入れるもの  
マイケル・J・アブドー

## 青少年

10

ベンソンクラブ  
メルビン・レビット

24

一緒にいると  
ラーラ・マイゼク

28

質疑応答  
証を得るには

32

奉仕の喜び  
ロウレニー・フォーシエトー

## 定期特別記事

1

読者からの便り

9

家庭訪問メッセージ  
神殿への参入資格を通して主を  
覚える

## こども

2

約そくの地への旅

4

青い子馬をさがして  
ジーン・リーデイル・ハブソン

8

約そくの地への旅  
やり方とカギ

10

分かち合いの時間  
聖典の博士

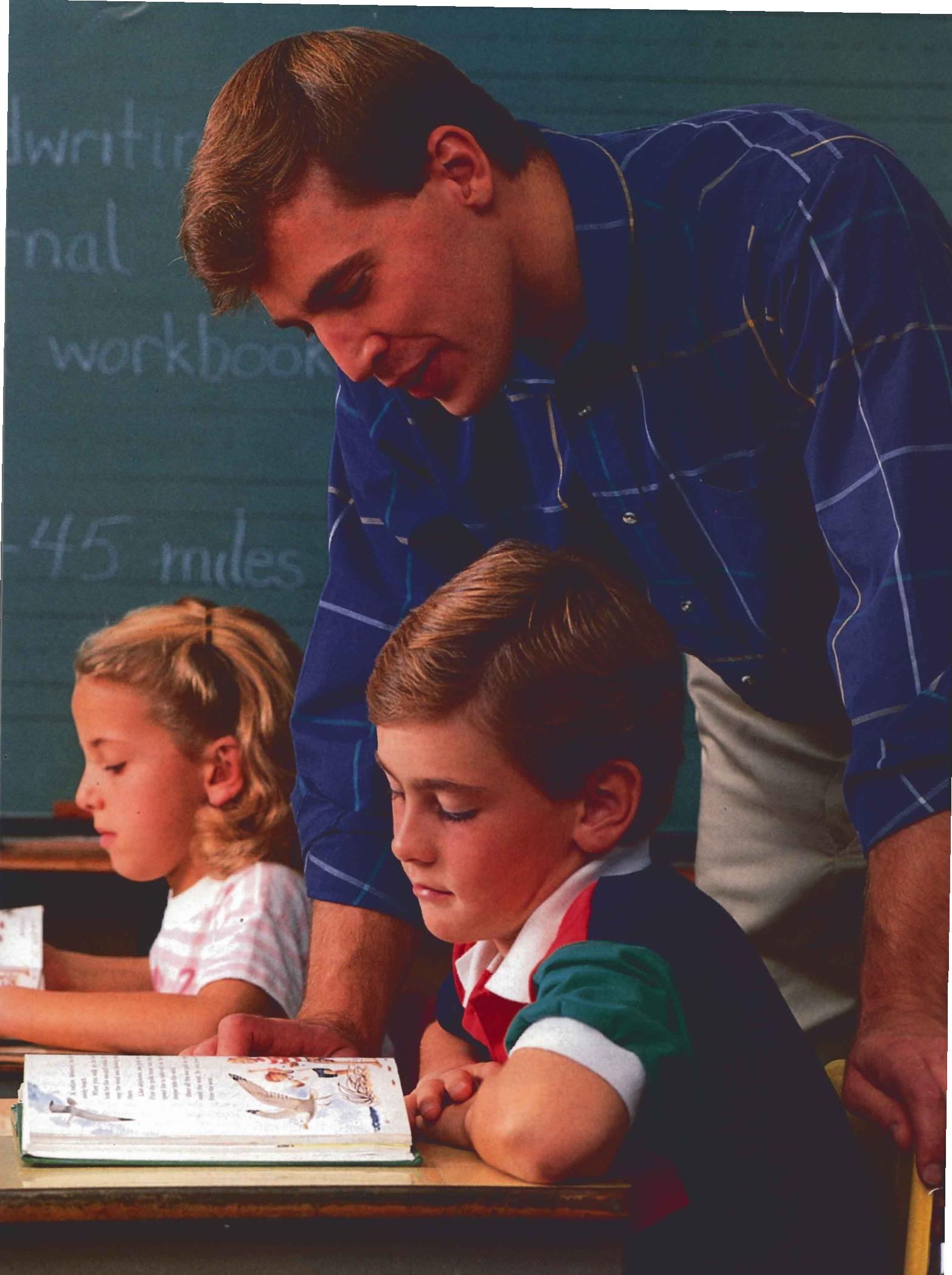
12

思いやりのない言葉は土の中に  
コリーン・コンラッド・トーリー

14

モルモン経物語  
ヤコブとシェレム

表紙—写真撮影ジェド・クラーク。  
「ベンソンクラブ」(p.10)参照



# たかが教師

大管長会第二副管長  
トーマス・S・モンソン

**私**たちはよく「時代が変わった」という言葉を聞きます。おそらくそのとおりでしょう。現代では医学、運輸、通信、探検など、様々な分野で非常な進歩が見受けられます。しかし、その変化の多い中にもまったく変わらないものもあります。たとえば、少年は依然として少年であり、同じように少年らしい誇りを持ち続けています。

あるとき、私はよく交わされる会話を小耳に挟みました。3人の小さな子供たちが、自分たちの父親の自慢話をしていたのです。ひとりが言いました。「ほくのお父さんは君のお父さんより大きいぞ。」すると、もうひとりが「だけどほくのお父さんは君のお父さんより頭がいいよ」と言い返しました。そこで3人目の少年が、「ほくのお父さんは医者さ」と言い、ひとりの少年の方を向いてばかりにしたように「君のお父さんはたかが教師じゃないか」と言ったのです。

母親の呼ぶ声でその会話は終わりになりました。しかしその言葉は私の耳の中でこだまし続けました。たかが教師じゃないか。たかが教師じゃないか。たかが教師じゃないか。その幼い子供たちもいつの日か、靈感あふれる教師の本当の価値を認めるようになり、そのような教師が自分の人生に残す貴重な足跡を心から感謝するようになるでしょう。

ヘンリー・B・アダムズ(1838年—1918年。アメリカの歴史家、小説家)が述べているように、「教師は永遠の影響を残す。その影響はとどまるところを知らない」のです。これは教師、すなわち家庭での教師、第2に学校の教師、第3に教会の教師すべてに当てはまる真理です。

**教師が未来の建設者としての務めを果たすのは、きわめて大切なことです。人格の形成や進路の選択に影響を与える教師の存在を軽く見積もることはできません。**

最も強く印象に残っている教師とは、自分に一番大きな影響を与えてくれた教師でしょう。それは母親であり、同時に父親でもあります。

最も強く印象に残っている教師は、私たちに最も大きな影響を与えた教師でしょう。その教師は黒板を使わなかったかもしれませんし、学位を持っていなかったかもしれません。しかしその教えは永遠で、教師の真心を伝えています。そうです。それは母親です。同時に、それはまた父親でもあります。事実、すべての親は教師なのです。

神から託された教育の務めを始めるに当たり、親は一層の靈感を必要とします。世にあって最もすばらしい心の結びつきは、広大な宇宙あるいは小説や歴史の本にではなく、子供の寝顔を見つめる親の表情の中にこそ見られるのです。「神のかたちに創造し」という聖書の一説は、親がこの経験を繰り返すたびに、新しくかつ生き生きとした意味を持ちます。家庭は天国と言われる安息の場所となり、愛ある両親はその子供たちに「祈ること、主の前に正しく歩むこと」とを教えるでしょう。(教義と聖約68:28)このように靈感された親には決して「たかが教師」という言葉は当てはまりません。

次に、学校の教師について考えてみましょう。家庭教育の一部を学校の授業に任せる時は必ずやって来ます。ジョニーもナンシーも、毎日家から学校へ通う楽しそうな子供たちの中に加わります。そこには新しい世界があります。そして子供たちは教師に出会います。

教師たちは生徒に夢や希望を抱かせるだけでなく、自分と自分の将来に関する生徒の心構えにも影響を及ぼし

ています。もし教師が未熟であれば、子供の人生に傷跡を残し、自尊心を深く傷つけ、自分に対する見方をゆがめてしまうでしょう。しかし、もし教師が生徒を愛し、その期待を裏切らなければ、子供たちの自信は増し、才能は伸び、将来は保証されるのです。

混迷を深め、次々と危機の押し寄せる現代社会の中であって、熟練した教師が将来を見据え、未来の建設者としての意義ある務めを果たすのは、きわめて大切なことです。20年という歳月がまたたく間に過ぎ、今幼稚園に通う子供たちが、その時は有為な市民か社会に負担をかける者のいずれかになっているのです。人格の形成や進路の選択に影響を与える教師の存在を軽く見積もることはとてもできません。文学、数学、科学、あるいはどのような学科の教師であろうと、事情は変わりません。教師は山をも動かすほどの信頼を生徒から勝ち得る必要があります。それができる教師には奇跡とも言える出来事が起きます。ある教科に突然、熱烈な興味を覚え、みずから進んで広範に書物を読み始める生徒がいるかと思えば、それまで気づかなかった自分の可能性に目覚める生徒もいます。また、もっと良い仲間との交際を決心したり、靈感を受けて生涯の仕事につながるような決意をする生徒も出てきます。

残念なことに、中には良い生活への橋渡しをするよりも、信仰を失わせる方を喜ぶ教師がいます。

J・ルーベン・クラーク Jr. 副管長は次のように言



「わたしに学びなさい」という主の招きに応じて献身的な教師は学んでいます。そして主の聖なる力を授かります。

いました。「本源的な真理に対する信仰に疑いを抱かせる者、あるいは信仰を破壊させる者は、人の身と霊を傷つけ、使えなくし、自由を奪っているのである。神はそのような者を厳しく責めたもう。ほかの人が日の光栄の栄に進むのを故意に遮る者がどれほど深い所に落ちていくかは測り知れない。」(「不死不滅と永遠の生命」2：143—44)

私たちはクラスを統制できないときでも、少なくとも生徒を備えさせることはできます。皆さんは「どのようにして」と問うでしょう。私の答えはこうです。「神の日の光栄の王国を目指して導き、神の真理と人間の理論を区別する物差しを与えなさい。」

私は数年前そのような指導書を手にしました。それは一般に合本と呼ばれている、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠を1冊にした聖典です。その本は愛する父親からよく忠告に従う美しい娘への贈り物でした。その父親は見返しのページにこのようなすばらしい言葉を書いていました。

「1944年4月9日

モーリンへ

あなたが真理と人の哲学の誤りとを見分ける尺度をいつも持ち、知識を増して霊的に成長するよう、この聖なる書物を贈ります。折あるごとに読み、生涯大切にしてください。

愛する父

ハロルド・B・リー」

「たかが教師」と言えるでしょうか。

最後に、私たちがいつも日曜日に接する教会の教師について考えてみましょう。ここでは、過去の歴史、現在の望み、未来の約束がすべて教えられます。教師は特にパリサイ人になるのはたやすく、弟子になるのはむずかしいと知るでしょう。生徒は教師が何をどのように教えるかでなく、どのように生きているかを見ているからです。

使徒パウロはローマ人へ次のように勧告しました。

「なぜ、人を教えて自分を教えないのか。盗むなど人に説いて、自らは盗むのか。姦淫すると言って、自らは姦淫するのか。」(ローマ2：21—22)

パウロは靈感に満ちた力強い教師であり、私たちのよい模範です。パウロの成功の鍵は、投獄された暗い牢での体験が語っています。パウロは暗い地下牢の中で重い鎖につながれ、兵卒の足音ばかりを聞いていました。パウロに厚意を寄せていたと思われる牢の番人は、皇帝の前でどう振る舞ったらよいかについて聞きたいことはないか彼に尋ねました。するとパウロは自分には導き手、すなわち聖霊がいると語ったのです。

もう一度尋ねますが、「たかが教師」と言えるでしょうか。

家庭にあって、学校や神の家にあって、すべての人の人生に影響を及ぼしているひとりの教師がいます。その教師は生と死、人のなすべき義務と行く末について教え



ました。またその人は仕えられるためではなく仕えるために、受けるためではなく与えるために、自分の命を救うためではなく、ほかの人々に命を捧げるために生きたのです。その教師は情欲よりもはるかに美しい愛を、財宝よりもっと豊かな貧しさを教えました。この教師は律法学者のようにではなく、権威ある者のように教えたと言われています。この教師とは、全人類の救い主であり贖い主である、神の御子イエス・キリストです。

「わたしに学びなさい」という主の招きに応じて、献身的な教師は学んでいます。そして主の聖なる力を授かります。

私は幼いころ、このような教師に教えられたことがあります。私たちは日曜学校のクラスで地球の創造とアダムの墮落、イエスの贖いの犠牲について学びました。彼女はモーセやヨシュア、ペテロ、トマス、パウロ、イエス・キリストを主賓としてクラスに迎えたのです。私たちは実際にその人々に会ったわけではありませんが、彼らを愛し、敬うことを学び、また彼らのようになろうと思ったものです。

さて、初めの対話に戻りましょう。「ぼくのお父さんは君のお父さんより大きいぞ。」「ぼくのお父さんは君のお父さんより頭がいいよ。」「ぼくのお父さんは医者さ」というあざけりを聞いて、少年はこのように答えることができました。「君たちのお父さんはぼくのお父さんより大きいかもしれないし、頭がいいかもしれない。パ

イロットやエンジニアや医者かもしれない。だけどぼくのお父さんは、ぼくのお父さんは教師なんだ。」

私たち一人一人がこのようにふさわしい心からの称賛を受けるに値するよう願っています。□

#### .....ホームティーチャーへの提案

1. 教師の影響力は永遠に続きます。だれもその際限を見極めることはできません。特に、両親、学校の先生、教会の教師にはこのことが言えます。
2. 教師は教える内容や教授法だけで判断されるのではなく、その生活態度によっても判断されます。私たちは自分の生き方を通して何が正しいかを教えているのでしょうか。
3. モンソン副管長は「すべての人の人生に影響を及ぼしているひとりの教師がいます」と述べていますが、それはどなたのことでしょうか。
4. 「わたしに学びなさい」という救い主の呼びかけにこたえるなら、私たちは神の力を受けることができます。

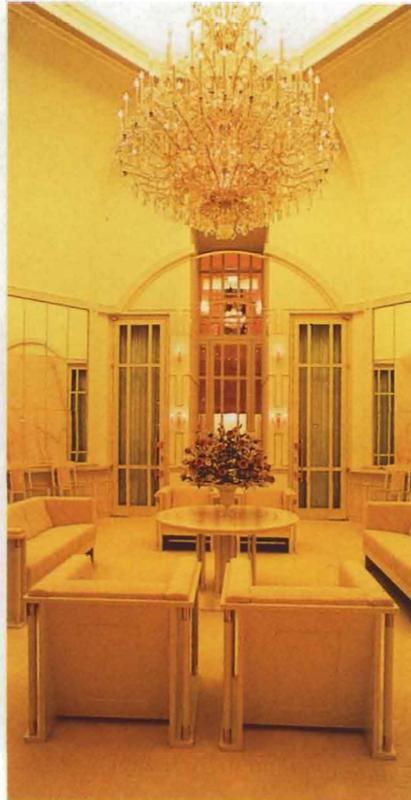
# 神殿への 参入資格を 通して 主を覚える

**教**会に活発になるにつれて、シャロン胸の中には、神殿に入りたいという望みが大きくなりました。「何か月もたってから、監督から『もう神殿推薦状を受ける準備ができましたね』と言われましたが、本当に自分はふさわしいのだろうか、本当に神殿で交わす誓約に忠実な生活ができるのだろうかと心が揺れました。……

初めて神殿に参入したあの日、私は本当に温かな思いと慰めを感じました。最初は孤独感もありましたが、同席している兄弟姉妹を見、ほかに目には見えない人々の存在を身近に感じ、そのような気持ちも薄らいでいきました。……不安や自分のふさわしさを問う気持ちが消えていくとともに、目に涙があふれてきました。」

神殿で受ける教えと儀式は神聖なものであり、私たちはよく準備をしたうえで神殿に参入しなければなりません。神殿への参入資格の有無は、監督(支部長)、ステーキ部長(伝道部長)が判断します。神殿参入推薦状を受けたいと思う人は、彼らの面接を受けるように定められています。以下の事柄を自問するなら、自分自身のふさわしさを吟味する助けとなることでしょう。

「福音への証を持っていますか。」  
「地元の指導者と教会幹部を支持していますか。」  
「道徳的に正しい生活をして



「初めて神殿に参入したあの日、私は本当に温かな思いと慰めを感じました。

最初は孤独感もありましたが、……目には見えない人々の存在を身近に感じ、

そのような気持ちも薄らいでいきました。」

いますか。」  
「教会員として人に恥じない生活をしていますか。」  
「知恵の言葉を守っていますか。」  
「教会の教えとプログラムを受け入れ従っていますか。」

場合によっては、神殿に参入できないこともあるでしょう。参入を延期せざるを得ないこともあるでしょう。しかし、いつも正しい生活をするように努力して、神殿参入を最も重要な目標として心にとどめることはできます。

私たち主の教会の会員には、いつか神殿に参入して、神を礼拝し、永遠の誓約を交わし、そこでしか得られない祝福にあずかるというすばらしい特権が与えられています。神殿への参入資格を満たした生活をしている人は、いつでもこれらの祝福にあずかる備えができています。

## 訪問教師への提案

1. 福音に従った生活をして自分が受けてきた祝福について訪問先の姉妹に話す。また神殿が自分にとってどれほど大切な存在であるかを話す。
2. 訪問先の姉妹に、神殿に対する気持ちを話してもらう。  
(「家庭の夕べアイデア集」pp.201-202参照)

# ベンソンクラブ

メルビン・レビット



礼拝堂のそばにある野外コートでは、バスケットボールが行なわれています。ボールが朝の空に弧を描いて高く上がります。その高さは3,800メートルにも達しています。次の瞬間には、バレーボールのボールがほぼ同じ高さ上がったかと思うと、

地面にたたきつけられます。

これは巨人あるいはスーパーマンの競技でしょうか。いいえ、そうではありません。このコートは、チチカカ湖畔、ペルーのプノにあるのです。チチカカ湖は世界一の海拔にある国際船の航行する湖です。海拔0メートルにいる最も背の高い選手よりも、プノで一番背の低い選手の方が、4,000メートル近くも高いことになるのです。

チチカカ湖は、ペルーとボリビア両国にまたがるアンデス山脈中の盆地にあります。プノは、湖の北西に当たる入り江近くに位置しています。空気は澄み渡り、青く透き通った湖水が太陽にきらめいています。住むには最高の場所で、教会の活動も活発に行なわれています。

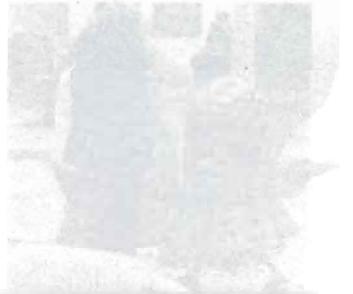
バレーボールをしている若い女性とバスケットボールをしている若い男性は、末日聖徒のプノ地方部の青少年です。会員ではない友人たちも2、3人交じっています。彼らは1年以上前にベンソンクラブを作りました。クラブの名前は、エズラ・タフト・ベンソン大管長に敬意を表して付けられましたが、彼らは一度も大管長に会ったことはありません。ただ、かつてすばらしい選手であった大管長を愛し、尊敬しているのです。教会の中には戦う相手チームがないので、土曜日ごとに、町のあちこちのチームと試合をしています。

前にも質問されたことがあります。バスケットボールやバレーボールが宗教と何の関係があるのか、と聞かれれば、次のような答えが返ってきます。

17歳のマリア・ルース・デ・ラ・トーレイは、「教会の会員として、私たちは生活のあらゆる部分で進歩しようと努力しています。才能を伸ばそうとしているのです。福音は、ほかの活動と同様にスポーツにも当てはまるの



「聖徒の道」の文庫版は、  
「聖徒の道」の文庫版は、  
「聖徒の道」の文庫版は、  
「聖徒の道」の文庫版は、





プノは3つの文化が出会う町です。  
通りに出ると、スペイン語、ケチュ  
ワ語、アイマラ語が一遍に聞こえて  
きます。



「一緒に競技をすることによって、  
私たちは前よりも一層親くなりました。  
気持ちが一致しているときには  
チームの力も強くなります。  
自分のことしか考えないような人がいると、  
チーム全体に迷惑がかかる、  
ということを学びました。」



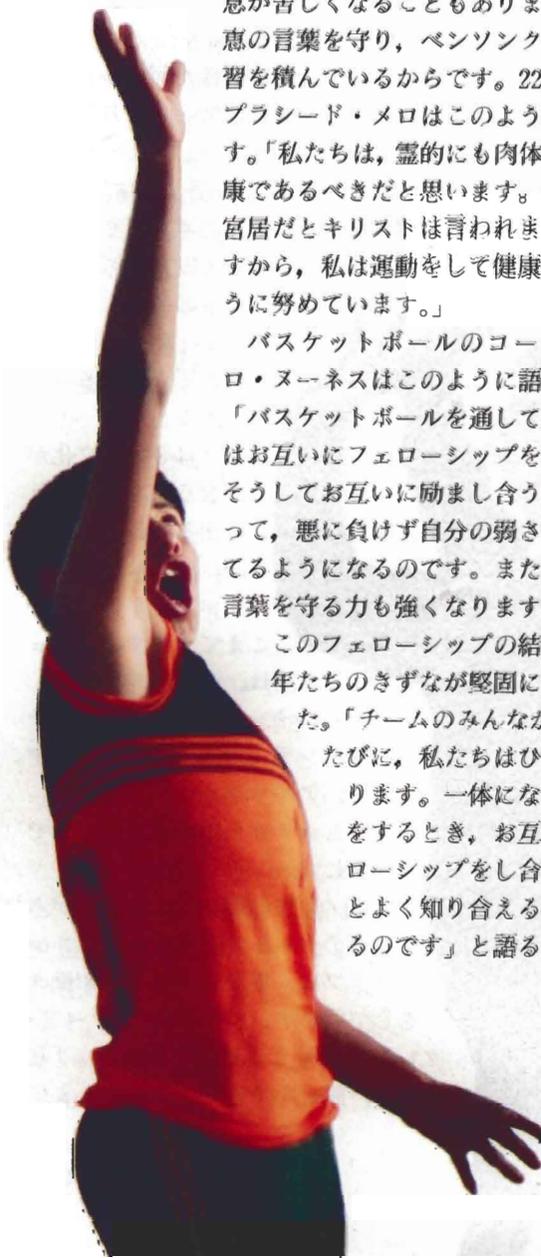
です」と語ります。

15歳のアルブレッド・バイヤスはこう話しています。  
「スポーツは、今日の世の中で蔓延しているような、私  
たちの生活を破滅させかねない事柄に比べると、ずっと  
健康的です。」

この高度では空気があまりにも薄いので、低地から来  
た人たちが病気になることがよくあります。しかし、こ  
この選手たちは、ボールを追って活発に動き回りますが、  
息が苦しくなることもありません。知  
恵の言葉を守り、ペンソククラブで練  
習を積んでいるからです。22歳の青年、  
ブラシード・メロはこのように言いま  
す。「私たちは、霊的にも肉体的にも健  
康であるべきだと思います。体は神の  
宮居だとキリストは言われました。ぞ  
すから、私は運動をして健康を保つよ  
うに努めています。」

バスケットボールのコーチ、ペド  
ロ・ヌーネスはこのように語ります。  
「バスケットボールを通して、私たち  
はお互いにフェロシップをします。  
そうしてお互いに励まし合うことによ  
って、悪に負けず自分の弱さに打ち勝  
てるようになるのです。また、知恵の  
言葉を守る力も強くなります。」

このフェロシップの結果、青少  
年たちのきずなが堅固になりました。  
「チームのみんなが集まる  
たびに、私たちはひとつにな  
ります。一体になって競技  
をするとき、お互いにフェ  
ロシップをし合い、もっ  
とよく知り合えるようにな  
るのです」と語るのは、19





歳のアレジャンドロ・ラソーです。

コンスエラ・コーカワンカは付け加えます。「一緒に競技をすることによって、私たちは前よりも一層親くなりました。気持ちが一致しているときにはチームの力も強くなります。自分のことしか考えないような人がいると、チーム全体に迷惑がかかる、ということを知りました。」

次に、競技を通して伝道することができます。バレーボールチームのコーチ、エルネスト・タマヨはこう言っています。「私たちの大きな目的は福音を伝えることです。このチームには教会員ではない姉妹が何人かいます。いつか彼女たちがバプテスマを受けて教会に入ればいいと思っています。」

14歳のメリンダ・メンドーサはこう語ります。「友人たちを試合に招き、試合を始める前に必ずお祈りをします。そのようにして友人たちに祈りを教えているのです。友人たちの中には、いつかきっと教会に入る人がいることでしょう。」

プノは3つの文化が出会う町です。通りに出ると、スペイン語、ケチュワ語、アイマラ語が一遍に聞こえてきます。ケチュワ語は、西暦1400年ごろ、ペルーにインカ帝国を築いたケチュワインディアンの古い言葉です。また、アイマラインディアンは、ずっとチチカカ湖の辺りに住んでいました。

プノの末日聖徒は、少数ながらひとつのグループを形成し、ベンソクラブは、異なる文化を結ぶ働きをしています。シモン・バーナード・クレメンテはこう語っています。「私たちは、試合をする相手チームとよい

「もちろん、勝つために試合をします。でも、試合を冷静に見つめると、どちらが負けるかは自然とわかるものです。負けるということはつまり、もっと練習に励まなければならないということなのです。」





ブノの教会の選手たちは、  
試合に勝っても負けても、  
感謝の気持ちを忘れません。  
彼らのスポーツマンシップは、  
ほかの宗派の友人や隣人との  
結び付きを立て直すのに役立っています。





ブノはチチカカ湖畔にあります。  
この湖は、  
海面よりずっと高い山の上にあるのです。  
空気があまりにも薄いので、  
低地からの訪問者はよく病気になるります。



「私たちは、靈的にも肉体的にも健康であるべきだと思います。体は神の宮居だとキリストは言われました。ですから、私は運動をして健康を保つように努めているのです。」



関係を築くように、一生懸命努力をしています。いつも簡単にいくとは限りません。こちらが勝つと、相手側は私たちを見たくもないという顔をするのがよくあります。逆にこちらが負けたときには、相手チームを祝福し、試合をしてくれたことに感謝するのはなかなかむずかしいものです。しかしそんなときにも、正しい態度を取ろうと一層の努力をするのです。」

ベンソンクラブは相手チームを祝福する機会に多く恵まれてきました。これまでは、男子女子両チーム共に、勝つことより負けることの方が多かったのです。もちろん、事態を打開しようと計画していますが、今のところ、不平を言う者はいません。

15歳の少女、マリツァ・メンドーサはこう言います。「もちろん、勝つために試合をします。だれだって負けるためにプレーをするなんてことはありません。でも、試合を冷静に見つめると、どちらが負けるかは自然とわかるものです。負けるということはつまり、もっと練習に励まなければならないということなのです。試合をするたびに、もっとうまくなろうと努力するところにおもしろみがあるのです。」

16歳のリチャード・キスペも同意します。「負けても勝利者でいることができます。負けて腹を立てると、ただの負け犬になってしまいます。」

19歳のフェリペ・パレハはこう語ります。「負けても勝っても、常に何かを学ぶことができます。これまでは、おもに負けることから学んできたということですね。」

15歳のセルバ・ムーニョスはさらにこう述べています。「目的は、勝つか負けるかではありません。要するに、最善を尽くし、一致団結して戦うことなのです。そういうことを試合の前に祈り求めるのです。」

チチカカ湖畔では、インディアンが、浅い水辺で育つ<sup>あし</sup>に似た植物(トトラ)を使って美しい手作りの舟を作ります。沖では、ウールー族が、この草のマットでできた浮き島に生活しています。ここに、プノの末日聖徒の青少年にはよく理解できる教訓があります。1本では微力な葦が、何本も織り合わされると、人を浮かせることもできるのです。

ベンソンクラブは、この地の教会の青少年の生活のほんの一部分にすぎませんが、彼らの靈性が沈まないために役立っており、正しく幸せな生活を送るのに重要な役割を果たしています。□





# 夫婦が互いに 耳を傾けないとき

夫婦は相手の話を聞こうとしないことがよくあります。しかし意思の疎通を円滑にする方法はあるのです。

ラリー・K・ランロイス

しばらく前に、お互いの間に深刻な問題を抱えたご夫婦とお会いしたことがあります。カウンセリングに来たとき、奥さんはいろいろな悩みを事細かに説明しましたが、ご主人は終始無言でした。話に加わってもらおうと努めたのですが、不機嫌な様子で、どんな質問をしてもひと言ふた言しか答えようとしません。すると返事を補足しようとして、奥さんが絶えず口をはさむのです。

とうとう私は奥さんに部屋を出てもらい、ご主人と一対一で話をすることにしました。彼は初めほとんど話さなかったのですが、考えをまとめる時間を与え、私が中断したり批判したりせず、裁いたりもしないことがわかると、自由に話し始めました。

それからは、私はほとんど口をはさみませんでした。面接の終わるころには、彼はすっかりした表情で感慨を込めてこう言ったのです。「話を聞いてくださってありがとうございました。こうしたことを妻に話したいと長年思っていたのですが、妻は私の話を聞こうとしないのです。」

その男性はなかなか上手に自分の考えを表現できなかったのですが、心の奥底にあった真情を吐露することができました。自分の気持ちをついに言葉にできたので、見るからに心が軽くなったようでした。幸いなことにこのご夫婦はお互いに愛し合っていることを再発見できま

した。おふたりとも互いに支え合い、きずなを強くしたいという気持ちがあり、それぞれに自分の分を尽くす決意があったのです。

聞いてもらおうとする努力をあきらめてしまうほど、だれも耳を貸してくれないとは、なんと痛ましいことでしょう。

聞くというのはひとつの技術です。ここで聞き上手になるためにすべきでない事柄と、すべき事柄を考えてみましょう。

## 上手な聞き方——すべきではない事柄

● 審判者になる。特につらい話題やむずかしい話題において、相手の口をつぐませる簡単な方法は、批判することです。たとえば次のような例について考えてみてください。夫が妻にこう言ったとしましょう。「上司が一日中ぼくに文句を言うんだ。何が気に入らないのか、わからないんだよ。八つ当たりはいい加減にしてほしいよ。」

妻はこう答えます。「上手に受け答えできるようにならなきゃだめよ。そんなときは何か言ったらどう。」

妻は夫の話聞いて同情の意を示す代わりに、対処の仕方が変われば問題は回避できたはずだと、審判を下しています。裁かれていると感じれば、夫もすぐさまきつ言葉で応酬するかもしれません。

聞き方を改善し、心からの関心を示すならば、  
ふたりの間の壁をなくし、打ち解けた話し合いを  
することができます。

こんなときに妻は次のように返答するとよいでしょう。「まあ、それは大変ね。ストレスもたまるでしょう。」こう言えば、責めるのではなく夫の気持ちを認めることとなります。

●理解と賛成を混同する。相手の言っていることを理解するという事は、それに賛成するという意味ではありません。聞くことにおいては、賛成するかどうかは問題でないのです。

たとえばあなたの伴侶がこう言ったとします。「皆の前であなたがあんまり親しげにすると、私きまりが悪いわ。」それに対して、「きまり悪いなんてことないよ」とあなたが答えたとしたら、彼女の本当に言いたいことを察し、気持ちを理解していることにはなりません。このような返事は欲求不満や憎しみを引き起こすことがあり、打ち解けた会話につながらないことは確かです。

「本当？ どうして？」といった応答の方がよいと思います。考えの違いを口にする代わりに、言われたことを理解していることを示し、話を先に進めるドアを開いてあげるのです。

●聞くことと議論とを混同する。聞くというのは一方的な行為です。相手が伝えることを、聞いて理解することを意味します。それに対して議論というのは、考えを相互に交換することです。議論にも聞く技術は必要ですが、聞く技術はそれだけ単独でも大切なものであり、ときには聞くことだけに集中すべきこともあるのです。

上手に聞くためには、議論するときのように聞いたり話したりとすばやく役割を入れ替えるのではなく、腰をすえてじっくり聞くことが大事です。聞いたり話したりの切り替えをしていたら、気持ちを集中することができず、話し手の本心を引き出すことがむずかしくなるでしょう。

冒頭の話に出てきたご主人は、明らかに、問題を話し合う相手ではなく、聞いてくれる人を求めていました。話を聞いてもらえないという欲求不満の治療法は、だれかに聞いてもらうことなのです。

●聞くことと問題解決とを混同する。聞くことは、解決法を提案することではなく、理解することです。次の

段階として、解決法を探す手伝いが必要になることもあるでしょう。しかしそれは聞くこととは違います。実際はそれが聞くのに役立つどころか、かえって妨げになることさえあるのです。

ある女性が聖餐会から帰宅して、深いため息をつきながら夫に言いました。「私、証が弱くなっているみたいなの。きょうはちっとも霊的に満たされなかったわ。」

このようなとき、私たちはすぐに助言して問題を解決しようとするのではないのでしょうか。しかし、聞き役から解決法の提案者に転じるのが早すぎると、伴侶の気持ちを本当に理解するチャンスを逸してしまいます。その結果、鈍感だと受け取られたり、ひとりよがりと思われるかもしれません。問題の解決は、しっかり聞いて理解した後で行なわなくてはなりません。

この場合、夫はこう答えました。「証が弱くなっているって？ どうしてそう感じるの？」妻への思いやりを示し、妻が気持ちをもっと深く掘り下げるように促しました。

●間違いを正そうとやっきになる。怒ったり責めたりなどの強い感情を表わすときは、とかく誇張があるものです。耳を傾けるときは、事実を訂正することよりも、相手の言おうとしていることに集中することが必要です。

あるご主人が私にこう言いました。「妻は何で実家の母と1日に3回も4回も話をしなくちゃならないんでしょうかね。」

すると奥さんが、「そんなことないわ。1日に4回も話したことなんてありませんよ」と言い返したのです。

ご主人は、「とんでもない。5回電話した日が少なくとも2日はあったぞ」と反撃しました。

ふたりは奥さんが1日に何回お母さんに電話したかについて、言い合いを始めたのです。肝心の、妻と母親が密着しすぎて夫婦の間がうまくいかないという夫の不満はそっちのけでした。

相手に事実を理解させればそれで事は足りると考えている人もいますが、感情が高ぶっているときには、実際は問題ではない場合がよくあります。間違いを正して事実をはっきりさせることに執着すると、お互いの理解を



妨げることになります。

●耳をふさぐ。本当は聞きたくないと思っていることは、誤解して受け取りがちです。どんなに明瞭に語られても、自分にとって不快なことは認めなかったり、自分なりの解釈をしたり、正しい理解をし損ねたりすることがあるのです。たとえば私の十代の娘が何かをねだるとき、「いいよ」という返事はいともたやすく理解できるのに、「だめだ」という返事には納得がいかないらしく、あれこれと質問してくるのです。

聞き手が、あることについてすでに自分なりの結論を出している場合には、それにそぐわないことに対して耳をふさいでしまいがちです。落胆や不安、恐れなどの否定的な感情があるときは、どんなにはっきりと言われても拒絶する場合があります。私たちは相手の語ることに自分の感情を投影させずに、話し手の気持ちを聞き取ることに集中しなければなりません。

以上、聞き上手になるための6つの「すべきではない事柄」を見てきました。では次に、「すべき事柄」を考え

てみましょう。

### 上手な聞き方——すべき事柄

●心からの関心を示す。天気やスポーツなどの日常の話題は、それほど熱意を込めて話す必要はないかもしれませんが、しかしもっと内面的な事柄や、話すのがつらかったり、険悪な事態をも招きかねない話題については、真心からの関心を示す態度が大切になってきます。聞き手が自分のことを本当に心配してくれていると感じなければ、心の奥底にある正直な気持ちを語る人はほとんどいないでしょう。好奇心から知りたがる、がみがみ小言を言う、脅す、権威を誇示する、これらはみな真心からの心配とはかけ離れた貧しい動機から出る行ないです。

●ときどき言葉をはさむ。聞きながら、ときどき相手の言わんとすることを簡単に要約してください。そうすると、あなたが聞いていることや理解していることが伝わり、誤解があれば訂正もできます。

聞くことはあらゆる人間関係の基本です。  
私たちが聞き上手になればなるほど、  
健全で実りある人間関係を築くことができます。

あるとき、カウンセリングをしていると、このようなことがありました。奥さんが心の底を打ち明け、ご主人は何も言わずにときどきうなずいていました。話が終わったとき、ふたりは仲良く時間を過ごし、前より親密になれたように見受けられました。帰るとき、ご主人が次のカウンセリングでは少しだけ一対一で話をしたいと言ったので、奥さんの承諾を得てから承知しました。そのカウンセリングで、ご主人は私にこう言ったのです。「この前は話をするチャンスがほとんどなかったので、きょうはひとりです。話したいことがたくさんあるんです。」

この男性は奥さんと親密な時間を過ごしたのではありませんでした。実は、会話を独り占めされていらいらし、奥さんの話に耳を傾けるどころではなかったのです。相手の話を要約したり、ちょっとした意見をはさむと、このような行き違いを避けることができます。

●言外の意味を読み取る。コミュニケーションのうち、言葉による伝達は30パーセントにしかなりません。大半は言葉以外のもの、つまり表情やしぐさ、声色、態度などによるのです。「あなたはどう思いますか」という単純な言葉も、言い方次第で反感、怒り、ユーモア、驚き、好奇心など、様々な感情を表わします。

調査によれば、一般的に言って男性よりも女性の方が言外のニュアンスに敏感です。このことは男女間の誤解の原因となる場合があります。男性は、言外の意味を理解するために女性よりも努力が必要であり、女性は、こういった面での男性の鈍感さに寛容にならなくてはならないと言えるでしょう。

●相手の気持ちを理解する。先に述べたように、要は感情の問題であるにもかかわらず、事実をうんぬんすることが多いものです。そのような場合には、言葉よりもむしろ、その言葉がどのような状況で発せられたかによって本当の気持ちがわかるものです。たとえば「太陽が輝いている」は、事実を述べた短い言葉です。しかしそれを、洪水をもたらし、災害を引き起こし、死者まで出した嵐の後で言ったとしたら、それは単なる事実を超えた劇的で深い意味を持つ感情表現になります。

強烈な感情は、しばしば間接的、あるいはあいまいに表現されます。話し合いがどのようになされたかという状況の方が、実は言葉自体が持っている意味よりもよく感情や心情を伝えることが多いものです。

●聞き手の感情はわきへ置く。話を聞いて感情的な影響を受けることはままあります。しかし良い聞き手になるには、自分の気持ちはさておき、相手の言うことを理解することに集中しなければなりません。

たとえば伴侶が、こう言ったとします。「あなたのお兄さんが今度はこんなことをしたのよ。もう顔も見たくないわ。」

あなたは当然お兄さんをかばいたくなるでしょう。しかしそうした反応を示せば、お互いを理解する機会を逃して、その代わりに口げんかが始まるかもしれません。自分の感情はひとまずわきへ置いて、「随分怒っているみたいだね。どうしたんだい」と聞いてください。そうすれば、伴侶の気持ちを認めながら詳しく説明する糸口を与えることになるのです。あなた自身の気持ちについては、問題をしっかりと見極めてから後に整理することにしてしましましょう。

聞くことはあらゆる人間関係の基本です。私たちが聞き上手になればなるほど、健全で実りある人間関係を築くことができます。

主は、「<sup>なんじ</sup>汝らつつしみて、わが神なることを知れ」(教義と聖約101:16)とされました。この言葉は、私たちが慎んで聞こうとしなければ、神を理解することもみ旨を聞くこともできないと示唆しています。そして私たちが自分の関心事をわきへ置き、自分の考えを述べることは後回しにして、まず慎んで相手の言うことを聞こうとしなければ、人を理解することも話を聞くこともできないと教えているのです。□

\*ラリー・K・ランロイス兄弟：夫婦および家族の問題を扱うカウンセラー。カリフォルニア州バサデナステーク部で両親のためのクラスを教えている。



# 一緒にいると

ラーラ・マイゼク



私の家族はとても仲の良い家族です。ここ何年かの間にそのことをよく感じるようになりました。高校を卒業して大学入学が間近になると、家族から遠く離れて住むのはどんなふうだろうと考えたり、ときには家から絶対離れたくないと思ったりしてしまいます。

私の家族は、おしゃべりしたり、庭仕事をしたり、物を作ったり、修繕をしたりと、何でも一緒にします。公園に行っても親子が別々に歩くことはありません。いつも一緒に楽しく過ごします。お互いへの思いやりを行動で示し、いつも一緒にいるので愛のきずなが強められるのです。この愛と一致を通して、私は両親から最も大きな影響を受けてきました。今の私があるのはすべて両親のおかげです。

父は教会員ではありませんが、私は心から尊敬しています。家のあちらこちらを修繕したり、家族や隣人に助けの手を差し伸べようと、いつも努めています。そして妹と私が仕事の手伝いをするのをとても喜んでくれます。

母は縫い物と編み物が得意で、私がミシンの調子を悪くしたり、指を針で刺したりしても怒らず忍耐してくれています。母はいつでも私たちのために時間を割き、私たちが話したいと思うときはいつでも話を聞いてくれるのです。

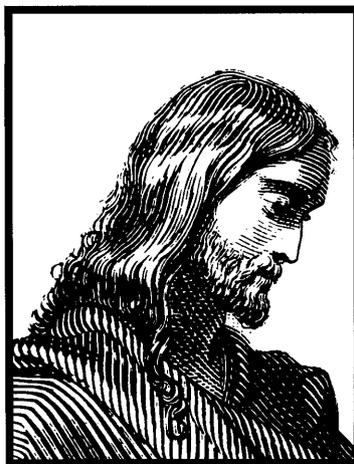
妹は末っ子で、私より3歳年下ですが、背は私より少し高く、いつも笑みを絶やしません。私たちは大の仲良しで、一緒によく買い物をしたり、遊んだり、読書したりします。妹は私の最高の友達です。

私はいつも祈りの中で、すばらしい家族がいることを主に感謝します。

私にとって家族は特別な存在です。家族で助け合うのはもちろんのことですが、それ以上に大切なのは、いつも一緒にいることで、お互いの愛がよく理解できることです。私たちはまだ永遠の家族として結ばれてはいませんが、いつの日か永遠に一緒に住めるようになることを祈っています。□

# 主の側に立つ

七十人第二定員会会員  
ジョージ・R・ヒルⅢ長老



**対**立する様々な見解を耳にして混乱してしまったときには、善と悪を対比して考えてみると、何が正しいかわかるでしょう。

ジョージ・アルバート・スミス大管長は、世の中には人を感化する力がふたつあるとよく言われました。「ひとつは、人を高める建設的な力で、それは天父から来ます。もうひとつは、人格をおとしめる破壊的な力で悪魔から来るものです。」「主の側に立って生活しているときには、サタンの力は私たちに影響を及ぼすことはできません。しかし、義の境界線を踏み越えて、悪魔の領地に迷い込むと、サタンの支配下に置かれることになるのです。」「(インブループメント・エラ」1935年8月号、p.278)

人は主の声に耳を傾けるか、サタンに聞き従うかを選ぶことができます。主の足跡に従いたいという心からの

望みを持ち、自分自身を制御できる人に対して、サタンは悪に誘い込む力がないことがわかります。サタンは、そそのかしはしますが、強制はできないのです。

福音の計画がすべての点で完全な生き方を示すものであることを知っている私たちは、日々の祈りの中で主の戒めを守ることを新たに約束し直すべきではないでしょうか。日々、決意を新たにするには、「これは福音の原則に添っているだろうか。サタンの領地に迷い込んでいるのではないだろうか」と慎重に考えてみることも必要です。

義の原則を実行し、そうすることでサタンの策略から逃れるなら、主の側にとどまろうという決意を強めることができますと思います。

福音の原則が真実であると知っている以上、その原則に一致した行ないをしようではありませんか。

## 主の教え

---

### イエス・キリストの福音

---

1. 福音は壮大です。そこには善なるもの、真実なるものがすべて含まれています。
2. 福音のあらゆる原則と律法は、それを守って生活する人を高め、自由にするものです。
3. 福音の原則に一致した行ないはすべて、生活を改善するものです。
4. 福音は神の息子や娘である私たちの永遠の行く末を説明しています。
5. 福音は、私たちには自由意志が与えられ、地上での生活において試練を受けると教えています。
6. 福音は、なぜこの世に善と悪が存在するのかを説き明かしています。
7. 私たちは、みずからの罪を認め、悔い改めるならば、赦されるのです。
8. 福音は、この世において私たちの得る一切の知識と英智は、「何にてもよみがえりの時われらと共によみがえる」(教義と聖約130:18)と教えています。
9. 福音の原則に添って生活するとき、みたまを受け、平安や喜びが与えられます。
10. 福音は健康の律法を教えています。それを守って生活すれば、体力、活力が与えられて病気にかかりにくくなります。
11. 人を愛し、喜んで奉仕することを学ぶにつれて、愛に満ちた人間関係を築き、幸福を見いだせるようになります。
12. 福音の原則に従って生活すると、家族間の愛と一致が強められ、より一層幸福を得ることができます。
13. 福音に従い福音の原則と一致した行ないをするなら、世の人々の私たちに対する信頼、信用が増すでしょう。
14. 福音の原則に従って生活することにより、家族が昇栄にあずかり、永遠の喜びを味わうことができます。
15. 主は、日の光栄の王国にふさわしい主の子供たちに、ご自身の所有するすべてのものを与えると約束されました。
16. 主は次のように勧告されています。「信仰、徳行、知識、節制、忍耐、兄弟の親切、敬虔、慈悲、謙遜、勤勉などの諸徳を忘ることなかれ。」(教義と聖約4:6) 私たちは、神とキリストが住まわれる日の光栄の王国にふさわしい者とならなくてはなりません。

## サタンの教え

---

### 悪魔とこの世

---

1. サタンは、うそや偽りの中に幾らか真実を混ぜて人をわなにかけ、滅ぼそうとたくらんでいます。
  2. サタンが唱える行ないは、人を墮落させ、とりこにし、盲目にするものです。
  3. 利己的な目標を達成しようとする行ないはすべて、真の喜びを得る力を弱めます。
  4. サタンは、この世的な人間哲学を上手に織り込んで人を欺き、短い現世での生活がすべてであると主張します。
  5. サタンの考えによれば、私たちの行為は、親や環境から受けた影響に左右されているのであり、自分のすることに対して自分には何ら責任がないこととなります。
  6. サタンは、現世や人生には目的などなく、偶然に支配されているのだと教えます。
  7. サタンは罪などというものはないと教えます。罪を認めず、悔い改めない人はサタンに服従することになります。
  8. サタンは、人が死ねばすべては終わるのであり、知識はこの世で成功するのに役立つときにのみ価値があると教えています。
  9. この世的な慣習に染まると、生活の中から霊的な賜などのみたまの力を排除することになります。
  10. サタンは、「飲んだり食ったりして楽しめ、つかの間の快楽を求める情熱や欲望におぼれよ」と教えます。このような生活は、必ず惨めで悲しい結果を招きます。
  11. サタンの誘いに乗ると、愛ある人間関係を損ない、みずから悲しみや孤独を味わうこととなります。
  12. この世的な生活を送ると、家庭の中に不一致や不信感、不幸が生じます。
  13. サタンに従い、福音の原則と一致しない行ないをすると、世の人々は私たちの動機や誠意を疑うようになります。
  14. サタンは、私たちの家族を永遠に引き離そうともくろんでいます。
  15. サタンは、一時的な快楽におぼれるように私たちをそそのかし、悔い改めない者への報いとして、永遠に日の光栄の王国から切り離されるようにたくらんでいます。
  16. サタンは次のように教えています。「悪を求め、陰口、虚栄、高慢、肉欲、不正直、みだらな行ない、姦通、ポルノグラフィ、たばこやアルコール、薬物の乱用におぼれよ。神とキリストの住む場所から永遠に切り離されよ。」□
-



# 証を得るには

私には証がありません。でも、教会員として受け入れられるために「私には証があります」と言わなければならないようなプレッシャーを感じる 때가ときどきあります。ときにはほかの人からそう期待されているからというだけの理由で、証を述べることもあります。はっきりとした証を持っていないくても、教会員でいられるのでしょうか。どうしたら証が得られるのでしょうか。また、どうしたら証を得たということがはっきりとわかるのでしょうか。

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

## 回答

もちろんあなたは間違いなく教会員でいられます。しかし、自分の状態をありのままに受け入れ、学ぶ機会を確保する必要があります。教会の集会に出席することにより、それが可能になります。

自分に証がないと感じたとき、どこから手をつければよいかというのはなかなかむずかしい問題です。しかし、方法はあります。まず手始めに、学んだ福音の原則について自分で確かに知りたいという強い望みを持ち、その原則に従って生活することです。自分の行動に責任を持つということがかなめです。

遠い昔にアメリカ大陸に住んでいた人々も、どうしたら証を得ることができるか、同じように悩んでいました。予言者アルマはそのような人々に、次のような助言をしています。「あなたたちがもし目をさましてふるい立ち、その能力をつ

くして少しなりとも信じながら私の言葉を実際にためしてみるならば、たとえ信じようとする望みを起すだけでもよい。しかし、私の言葉の一部分でも受け入れるほどの信仰ができるようになるまで、この望みを育ててゆけ。」(アルマ32:27)

アルマはここで試してみるように言っています。つまり、主のみ言葉に従って生活してみることです。あなたは最初の1歩を踏み出しています。すなわち、証を得たいという強い望みを持っていますから、次は2歩目の試し、つまり福音の教えに従って生活をする必要があります。

28節でアルマは、証を得ることを種の生長になぞらえて話を進めています。もし種をまき、それを大切に育てていき(つまりこれは、神のみ言葉に耳を傾け、聖典を読み、神が私たちに望んでおられる生き方につい

てもっと深く学ぶ、ということですが)、それが生長し始めたときに不信心の心でそれを抜きとったり捨てたりしない限り、やがて「好い味を感じる」(28節)実を結ぶようになります。つまり、これが証の始まりです。

証を述べるときに、自分の知っている以上のことを言わなければならないというプレッシャーを感じる必要はありません。ほかの人が述べている証をそのままねて証を述べる必要はありません。自分がすでにわかっていることだけを述べればよいのです。福音が真理であることを知りたいと心から願っているとか、福音の教えに従った生活をしようと努力している、と言うこともできるでしょう。証を述べないようにしようと考える必要はありません。なぜなら、自分の心にある思いをできるだけ素直に表現したときに証が得られたり、自分の信仰が深まったりするのはよくある経験だからです。

## 青少年の意見

あなたが主を愛し、その戒めに従っている限り、証を得ることはできると思います。証を述べなければならないなどというプレッシャーは感じないでください。ほかの人がどう思おうとそ

れは問題ではありません。問題は主がどのように思っておられるかということです。私もたびたび疑いの気持ちを抱くことがあります。でも、祈ることによって心を主に向け、この教えが正しいという確信を得るようにしています。祈り、断食をし、深く考え、そして研究することによって、あなたも証を得て、それを揺るぎないものにする事ができます。



ディディ・ギルクリスト  
(15歳)

アメリカ、インディアナ州  
ハイランド

私も本当にこの教会が地上で唯一のまことの教会であるのかどうか、悩みかけたときもありました。私の友達も皆、それぞれ自分の所属する教会が真実であると信じている様子でしたし、人間的にも高い標準を維持している良い仲間でした。

私は証を得るための目標を設定しました。時間がかかることは承知のうえでした。私は、祈りを捧げ、聖典を研究し、教会の集会や

活動には必ず全部参加しました。人の話にはきちんと耳を傾け、わからないことは質問しました。また両親からそれまで教わっていたことについて残らず考えてみました。私は福音について本当の意味で理解して初めて、友人たちの教会についても以前より深く知ることになりました。友人たちと話をしているときに、私は福音というものが自分の人生に実に深い満足感を与えてくれることに気がきました。友人たちと自分の信仰について話し合っていたときに、自分でもこの教会が真実であるとわかったことに気付いたのです。そのときに味わった気持ちは本当にすばらしいものでした。

だから決してあきらめないでください。証を得たいという望みがあること自体、すでに証を築きつつあることのひとつのしるしです。



ケリアナ・コーブランド  
(14歳)  
アメリカ、ペンシルベニア州フランクリン

どんな人の人生であっても、自分の証の有無を疑うことが必ず一度や二度はあります。私の場合、頭ではこの教会が真実であるとわかっていながら、心の中ではそのような証がない、あるいはあるとは思えない、と思ったときに、そんな気

持ちになったことがあります。

私は自分の特別な証が欲しいと思いました。私は何度も断食し、熱心に祈りを捧げました。そしてようやくある日、聖餐会に出席していたときに、心が和らぎ始め、目から涙があふれたのです。以来、証会や聖餐会のときに、たびたびこのようなことが起きます。私はあの日、これが福音は真実であるという私の特別な証だと実感したのです。また、それまでも自分はこの教会が真実であるを知っていたことにも気がきました。

教会が真実であるかどうかはわからないからといって、恥ずかしがる必要はありません。私たちは皆、霊的な意味で福音に改宗しなければならぬからです。自分の家族がたとえ何代にもわたって教会に集い続けているとしても、それはまた別の問題です。

トニー・S・ロルズ  
(15歳)  
オーストラリア、ウェストミード

もちろん、教会はまだ確かな証を持っていない人のためにもあるのです。私自身も改宗者ですから、その気持ちはよくわかります。私は2年前にバプテスマを受けました。でも、そのとき、私には確かな証はありませんでした。ただ、心の中では、何かよいことをしているという気持ちがありましたので、それを支えにしてきました。時間がたつにつれ、私の証も強くなり

始めました。福音の中に、この部分だけは正しい、と心から思えるものがあつたら、それを支えに努力してください。祈りと聖典の勉強を欠かさず、確固とした目標を抱き続けていれば、今教えられていることがだんだん理解できるようになることを約束します。これが生活の一部になれば、自分の信じている教えに従って生活できるようになります。その結果、自分でも気づかないうちに、本当に強い証を述べるようになるはずですよ。どうぞ、あきらめないでください。



クリスティー・ボーン  
(17歳)  
アメリカ、ユタ州テイラーズビル

証を得たいと望んでいるあなたは、それだけで証を得るための第一歩を踏み出していることとなります。でも、これに従いさえすればすぐにでも証を得ることができるという即席調理法のようなものがあるわけではありません。証というのは、祈りと断食を重ね、またときには試練を経て初めて得られるものなのです。自分の信仰が試練や逆境によって試されて、ようやく証もはぐくまれ深まっています。

天父はあなたを見守っておられます。あなたを愛し、

あなたに関心を抱き、真理を知りたいというあなたの強い望みに心からの信頼を寄せておられます。私は、福音が真実であるとうまく知ることができた日のことを忘れられません。以来、それ以前の自分に戻ることはありません。

心に感じてもないことを言わなければならないというプレッシャーは感じないでください。

次の3つのことを実践してみようお勧めします。

1. アルマ書32章とモロナイ書10章4-5節を読む。
2. 祈る。朝夕ひざまずいて、福音が真実であることを教えてください、天父に心からお願ひする。
3. 断食する。祈りと断食がひとつになって、奇跡が起きるでしょう。

私の証は自分にとってとても神聖で、かけがえのないものです。この証はこの地上のものから得たものではありません。ですから、この地上のいかなるものも、私からこの証を取り去ることはできないのです。



リチャード・ブランソン  
(18歳)  
アメリカ、ユタ州テイラーズビル

あなたの気持ちは私にもよくわかります。私も以前同じような気持ちになったことがあるからです。私は、証を得るためには、自分か

ら積極的に教会の教えを受け入れてみるしか方法がないのではないか、と思っています。つまり、祈ったり断食したりするだけでなく、実際にみずから行動してみることです。宣教師と一緒に伝道に出かけてみるとか、教会の活動に積極的に参加するといったことなどができるでしょう。あまりくよくよしないでください。あなたも、準備ができたときには、証が得られるからです。



キャリー・ヒンクル(12歳)  
アメリカ、ウェストバージニア州バックハノン

私は何年間も、自分には証がないと思っていました。でも、監督が「この教会が正しいということはまだわかっていないかもしれないけれど、君は教会で良い気持ちを感じているし、教会に来ていたときは正しいことをしていると知っているね」とやさしく説明してくれました。私は、証があるからといっていつも心の中で燃えるような思いがあるわけではないことに気づきました。自分のしていることが正しいとわかったときに感じる心の中の静かで平安な気持ちが証である場合もあるのです。もしあなたが教会に来て良い気持ちを味わっているとすれば、たぶん心の中にすでに証の種がまかれたのではないかと思います。

マイヤ・ウェイコット  
アメリカ、コロラド州アーバダ

自分で確信を持っていないものについて証をする必要はないと思います。でも、自分ではっきりと確信できることもあるはずです。たとえばそれが小さく単純なものであっても、そのようなことについて証を述べるようにしたらよいのではないのでしょうか。

もしあなたが本当に望むのなら、証を得ることは可能です。私たちには証を得る権利があるからです。同時に、あなたが本当の意味ですでに証を得ている可能性もあります。いまだに偉大な啓示が与えられないからといって、必ずしもそれは福音が正しいかどうかかわからない、ということではないからです。



ルース・リチャードソン  
(17歳)  
アメリカ、ユタ州テイラーズビル

私は宣教師です。私は、伝道に出て最初の4カ月、自分の証というものがありませんでした。だからあなたが今経験している気持ちがよくわかります。つらいことでしょう。でも、今になって考えてみると、あなたがこうして尋ねているように、私も勇気を出してだ

れかに尋ねておくべきだったと思っています。そうしたら、伝道に出るに当たってもっとよく準備ができたかもしれません。

あなたが今のような気持ちでいることは、決して悪いことではありません。このようなことを尋ねてくること自体、証を得るためにはどんなことでも喜んでやりたいというあなたの気持ちを表わしているからです。

証を種にたとえてみたいと思います。教会員として生まれ育った私たちの大部分は、まず親の証に頼ることから始めます。これは別に悪いことではありません。親は自分で言っていることが真実だとわかっているのですから、間違いなくそれは真実なのだろうと私たちは考えます。この段階で種がまかれるわけです。

種の生長を促すにはどうしたらよいのでしょうか。適切な栄養を与えて養い育てる必要があります。証も同じです。もし教会についての証を得たいと考えたら、私たちの宗教のかなめ石であるモルモン経を手にとって、読む必要があります。でも、読む必要があると言っても、じっと座って一度に最初から最後まで読み通せということではありません。次のような方法で読んでみてください。私も私の求道者の多くも、この方法で成功しました。

1. たとえば、「信仰」といったテーマをひとつ採り上げます。

2. 聖典の中で「信仰」に関係する聖句を読みます。それから、その聖句のある章全体を読みます。こういう読み方をすると、その時

代の様子についてある程度把握できます。

3. 章全体を読み終えたら、またその聖句に戻ります。でも、このときには、その聖句を自分に当てはめて考えます。

4. ここまできたら、モロナイ10章3-5節にあるモロナイの勧めに従ってみます。その勧めに従って祈ることです。私は、天父が必ずみたまを通して答えてくださることを約束します。

私は伝道に出る前にこうしたことをしておけばよかったと思っています。モルモン経を読み通したことは読み通したのですが、それから得られたものは多くはありませんでした。その後伝道に出た私は、まず同僚たちの証に頼りました。しかし、それは私にとって何の役にも立ちませんでした。この段階で、自分の証を得ようと決意したわけです。

私は、自分の心の中にまかれた種を養い育て始めました。そして、聖典に書かれていることをもっと深く理解できるよう、今でも聖典を読み、研究し、深く考え、それについて祈ることによって、養い続けています。種と同様、証も養い育てなければ、枯れてしまうからです。その種を養い育てていくと、心の中でふくれ始めてきます。その状態になるまで努力してみてください。そうすれば、自分の心に正直に、証を述べるができるようになります。この方法で何らかの成果が出るよう願っています。

ジョン・ホッジ長老(21歳)  
イギリス、ロンドン南伝道部

# 奉仕の喜び

ロウレニー・フォーシエトー

**19**88年のことです。ブラジルのサンパウロにあるジャカナワード部の若い女性3人は、教会の近くの療養所に住んでいる年輩の婦人たちを訪れたいと強く願っていました。

この思いはやがて、「おばあちゃんをつくろう」という奉仕計画に発展することになり、まもなくワード部のほかの若い女性たちも参加し始めました。その後、ほかのふたつのワード部からもたくさん若い女性が参加しました。今では、教会員でない人々もその奉仕計画を手伝ってくれています。

これらの若い人々は、キリストの純粋な愛を持つとはどういうことかを学んできました。療養所にいる老婦人たちの生い立ちは様々です。自分の両親のことや、自分がいつ、どこで生まれたかさえ知らない人もいます。

そのうちのひとりに、セバスチャナ・マリーア・カタリーナ・デ・ゼゾースという話好きで明るい婦人がいます。車いすにちょこんと座っている彼女は、自分の年を知りません。また、親類も見舞い客もいません。愛と奉仕の精神に満ちた若い人々の訪問を受けるようになってから、彼女はすっかり別人のようになりました。カタリーナは今、自分には家族がいると感じています。彼女は、新しい家族であるこれらの若い人々と時間を過ごすこと

を何より楽しみにしています。

79歳になるフローラ・エスペランサ・ガラシーは家族の話になると表情を曇らせます。彼女のために誕生パーティーが開かれたことがあります。この思いがけないプレゼントはフローラにとって生涯忘れられない思い出となりました。今では彼女の唯一の財産とも言えるこの若い友人たちをフローラは温かく抱きしめるのです。

75歳くらいに見えるベルギーニヤ・フェルナンデスも、自分がいつ生まれたのかを知りません。療養所の周りを歩くのがやっとで、耳もあまりよく聞こえません。しかし、新しい友達に親しく接するときの顔は喜びに輝いています。

これらの若い人々はいつも励ましの言葉を語り、老婦人たちを手助けすることをいといません。思いやりを示すのに、何もむずかしいことをする必要はありません。カタリーナにはタオル、フローラには洋服、ベルギーニヤにはケーキを、という具合にすればよいのです。これらの若い人々は、よい羊飼いの群れの1匹が持っている必要を満たさなくてはならないのを知っています。愛とやさしさと思いやりを無償で与え、大きな報いを受けているのです。□



# パロの国





エジプトは数ある国々の中でも悠久の歴史を誇る国です。そこはかつての支配力を物語る国であり、将来もそこにとどまる神の力を証する国なのです。

リチャード・M・ロムニー

**聖**典に関連して「エジプト」というと、私たちは旧約聖書に登場するエジプトのことを想像しがちです。ところが実際は、モルモン経の随所で、エジプトの言語や民族、習慣の一部を見いだすことができます。高価なる真珠もかなりの部分がエジプトを背景として記されています。エジプトは様々な王朝が盛衰を重ね、徐々に固有の風土を形成した国、歴史を通じて神がご自身の目的を遂げるために常に用いてこられた国なのです。新約聖書の中では幼い救い主の「避け所」として描かれました。

マタイ伝の著者は次のように記しています。博士たちが「幼な子のいる所」を訪れた後、「主の使が夢でヨセフに現れて言った、『立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を探し出して、殺そうとしている。』

そこで、ヨセフは立って、夜の間<sup>に</sup>幼な子とその母とを連れてエジプトへ行き、ヘロデ王の恐ろしい布告から逃れることができました。ヘロデ王は「ベツレヘム……にいる2歳以下の男の子を、ことごとく殺した」のでした。

ヨセフとマリヤと幼いイエスがどれくらいの期間をエジプトで滞在したのか記録はありませんが、ヘロデ王の死後、一家は故郷に戻りました。それは幼児虐殺の時からそれほどたつてはいなかったであろうと考えられています。

「ヘロデが死んだのち、見よ、主の使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて言った、『立って、幼な子とその母を



連れて、イスラエルの地に行け。幼な子の命をねらっていた人々は、死んでしまった。』

そこでヨセフは立って、幼な子とその母とを連れて、イスラエルの地に帰った。」

ところがヘロデの息子アケラオがイスラエルを治めていると聞いたので、ヨセフは「そこへ行くことを恐れた。そして夢でみ告げを受けたので、ガリラヤの地方に退き、ナザレという町に行って住んだ。」救い主は成年に達するまで、この地に住まわれました。(マタイ2章参照)

幼い救い主が2、3週間とも2、3カ月とも言われる期間を過ごされたエジプトの地では、今でも砂漠の砂が当時と同じようにサラサラと音を立てています。熱風は今も吹きつけ、雲ひとつない空と焼きつけるような太陽の下で、砂丘は果てしなく広がっています。聞こえてくるのは砂の流れる遠いかすかな音ばかりです。砂は数知れぬ砂丘や風紋の生滅を繰り返しながら移動し広がっていきます。

4月から6月にかけて、気まぐれな嵐がときどき起こ



「エジプトの地始めて一人の女によりて発見せられしがこの女はハムの娘にしてエジプトスの娘なりき。エジプトスとは、カルデア語にてエジプトを表し、これはまた禁ぜられしものなる意なり。

この女がエジプトの地を発見せし時、そは水の下にありたれど、後にこの女はその息子らをこの地に定住せしめたり。」(アブラハム1:23-24)





り、アフリカの奥地から乾いた南の風が吹きつけてきます。すると砂丘がうなりを立てます。吹きつける砂はガラスの破片のようになり、目を刺し、衣服を引き裂き、皮膚は骨の芯まで感覚を失ったようになります。

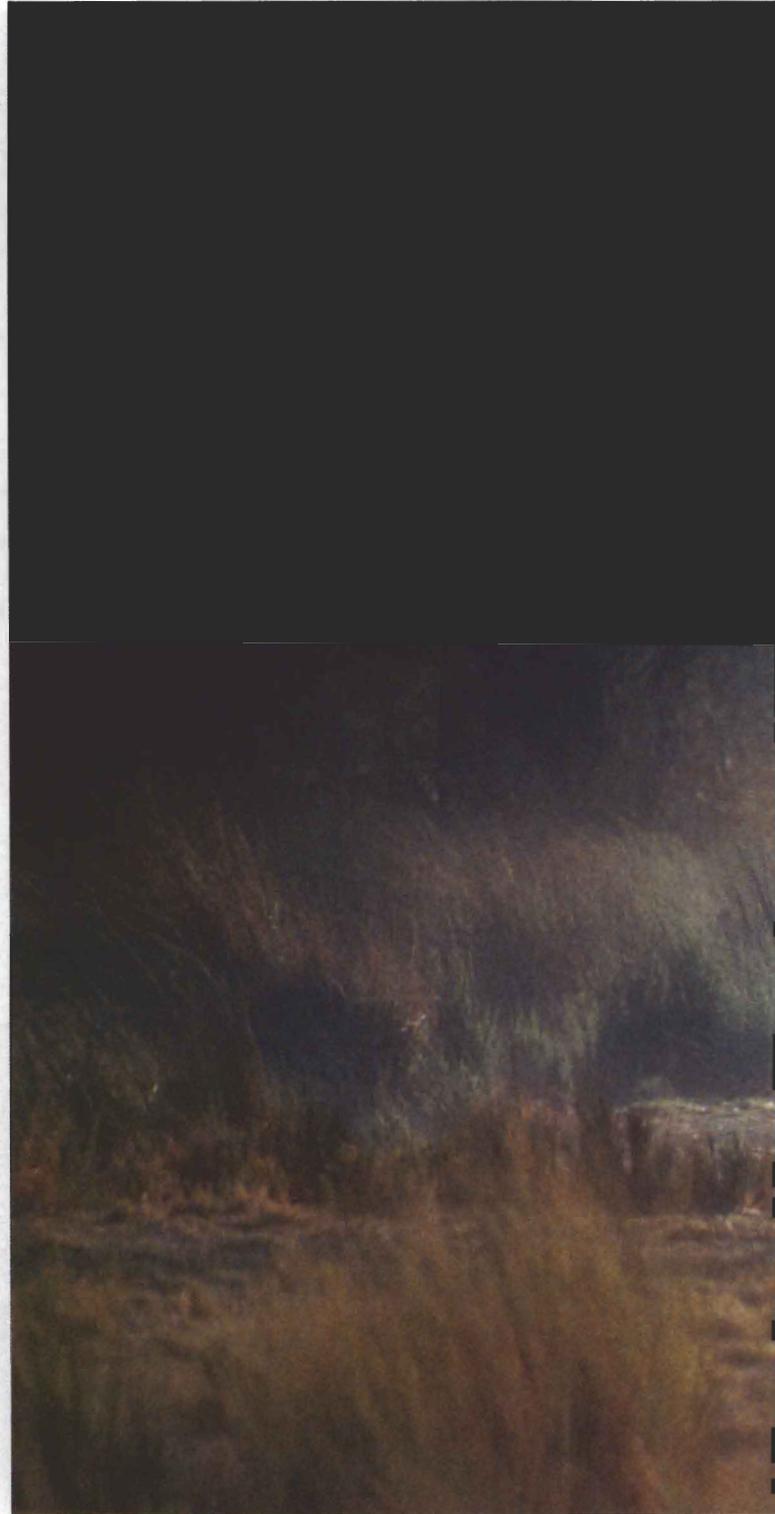
ところが突然嵐は収まり、また元の静寂が一面に広がります。

砂漠は当時もここにありました。同じ砂漠が今もここに 있습니다。砂漠はあの巨大なピラミッドさえ取り囲み、沈黙を強いています。砂漠こそ最後のあるじ、究極の勝者、無限の支配者なのです。

ただ、水のある所は別です。

水のある所には生命があります。この水のある所、ナイル川は巨大な緑のナイフのように砂漠を切り裂いて流れています。中には魚類や様々な生物が住み、川の両岸には葦がそよぎ、ナツメヤシが茂っています。水のある所の周辺には人々が群がり、町が形成されます。

水のある所にはトキが空に舞い、女たちが歌い、子供たちが水遊びに興じています。



「人の子よ、エジプトの王パロのために、悲しみの歌をのべて、これに言え、あなたは自分をもろもろの国民のうちのししであると考えているが、あなたは海の中の龍のような者である。あなたは川の中に、はね起き、足で水をかきまぜ、川を濁す。

わたしはあなたについて、多くの民を驚かせる。その王たちは、わたしがわたしのつるぎを、彼らの前に振るう時、あなたの事でおののく。あなたの倒れる日には、彼らはおのおの自分の命を思って、絶えず打ち震える。

わたしはあなたの民衆を勇士のつるぎに倒れさせる。彼らは皆、もろもろの国民の中で、最も恐れられている者たちである。彼らはエジプトの誇を断つ、エジプトの民衆は皆滅ぼされる。」(エゼキエル 32：2, 10, 12)



「主はご自分をエジプトびとに知らせられる。その日、エジプトびとは主を知り、犠牲と供え物とをもって主に仕え、主に誓願をたててこれを果す。

主はエジプトを撃たれる。主はこれを撃たれるが、またいやされる。それゆえ彼らは主に帰る。主は彼らの願いをいれて、彼らをいやされる。

万軍の主は、これを祝福して言われる、『さいわいなるかな、わが民なるエジプト、わが手のわざなるアスリヤ、わが嗣業なるイスラエルと。』(イザヤ 19: 21-22, 25)



「エジプトはナイルの賜」と語ったのは、紀元前5世紀のギリシアの史家、ヘロドトスでした。水がなければ国土は荒地のままだったでしょう。ナイル川は人と動植物の生命線なのです。

エジプトは今日でも2,000年前の状態とあまり変わっていません。褐色の肌をした農民が現在でもはねつるべ(片方の端におもりをつけ、もう片方にバケツをつけて水をくみ上げる、てこのような装置)を用いて水をくみ上げる、骨の折れる労力を必要としている国なのです。麦や米、トウモロコシ、綿花などの作物では世界的にも高い収穫高を誇っているが、なお極度の貧困に苦しんでいます。人口の63パーセントはナイル川のデルタ地方に密集し、残りはナイル川上流の村や町に散在し、泥土を利用した家屋に住んでいます。居住可能な地域は国土のわずか3.6パーセントにすぎません。そのほかの地域はときとして何年もの間、雨の降らないような場所なのです。

しかしエジプトは工業国としての一面も持っています。ダムが供給する電力は、砂漠を縦断する高圧線を通して、新たなナイルの賜を送り届けています。遊牧民が現在で

もオアシスからオアシスへと行き交う一方で、交通網が発達して輸送トラックも行き交っているのです。近代的な空港施設や定期航行が乗客や工業製品の移動を可能にしています。そしてエジプト人たちは今も変わらず親しみやすく勤勉な国民性を保っています。

かつて、トウトメス3世やアメンホテプ3世、ラメセス2世の統治の下で繁栄を誇った国は、再び隆盛を得ようと努力を続けています。過ぎし日の栄光を物語る墓所や神殿は永生を願ったパロたちを記念するために<sup>こんりゆう</sup>建立されましたが、今では博物館や観光名所として人間のあこがれと虚栄の<sup>けいめい</sup>形骸だけを残しています。

こうした古代の建造物の傍らに立つと、一方の側面には繁栄と希望を見て取ることができますが、他方の側面には荒涼とした砂漠が目の前に続いているだけです。これが聖典にたびたび名前の登場するエジプトの国なのです。エジプトの国を観察すると、人の営みが時の流れの中でいかに卑小なものであり、神はこれからも時を超えてその民と<sup>い</sup>予言者を導いていかれるということがわかるでしょう。□



*Handwritten signature and date*

# 旧友

リチャード・W・カータック

18年振りに会ったデュースは、酒びたりに家もない、  
哀れな姿でした。

ある6月の午後のことでした。仕事上の集まりに出るために町を歩きながら、扉の開け放された1軒の居酒屋の前にさしかかったとき、私はふと中をのぞいてみたいという衝動に駆られました。しかし私の目に入ったものは、長いカウンターと一列に並んだ丸いすだけでした。私はきびすを返しました。もともとそんな場所には興味がありませんでしたし、第一そのような所には足を踏み入れる気にすらなれませんでした。しかし、再び歩き始めた私の心に、戻って中をもっと調べるようにという今までにない強い思いがわいてきたのです。

私は不思議な気持ちでその居酒屋に戻り、入り口から中をのぞき込みました。「こんなことをして何になるんだらう。」そう思いながら見ると、カウンターの後ろにバーテンがひとり立っていただけでした。私はまた歩き始めました。でも、角のところで信号が変わるのを待っていたとき、戻らなければならないという気持ちが前よりもさらに強くわき上がってきたのです。私は戻りました。

人の気配はなく、バーテンの姿さえありませんでした。私は奥に進みました。すると隅の方に人影がありました。ひとりの男が、目の前のグラスに覆いかぶさるようにして、丸いすに座っています。ぼさぼさ頭で無精ひげを伸ばした顔には、何となく見覚えがあるような気がしました。

近寄るにつれ、ある人の記憶がよみがえってきました。小柄できゃしゃな体つきも似ています。まさかデュースじゃ……。(本当の名前はドゥエインでした)デュースには18年も会っていませんでした。でも、デュースがこんな姿で私の前に現われるなんて信じられない気持ちでした。「デュース、デュースかい？」私は尋ねました。その男はぼんやりと辺りを見回しましたが、何も答えません。

「デュース、ここで何をしているんだ。まさか君だなんて、信じられないよ。」

まさしくそれはデュースでした。十代のころ、親しく過ごした友達でした。

デュースと双子の兄弟のエースは、親とはうまくいっていたのですが、しつけらしいしつけを受けたことはほとんどありませんでした。父親は勤勉な理髪師で、人好きがするものの酒におぼれがちだった妻の世話を、なにくれと焼いていました。

デュースは子供のころに患った小児まひのために足がひどく不自由で、片手もあまりよく使えませんでした。また十代のときに2、3回大きな事故に遭ったために、つえに頼ることを余儀なくされました。しかしこうした障害は、むしろ彼の絵の才能に磨きをかける結果となり、彼自身も油絵を描くことに没頭するようになったのです。

彼の絵は写実的で生き生きしていました。今でも思い出すのはトラの絵です。カンバスから飛び出して来るのではないかと思うほど見事なものでした。

その後、海軍に入隊した私は、デュースと接触する機会を失ってしまいました。聞くところによると、エースも海軍に入り、それから先の行方はだれにもわからないということでした。

「だれだい。」デュースは物憂げにそう言いました。

「リチャードだよ。昔の友達だよ。」

かすかに記憶がよみがえったのでしょうか、彼の目が一瞬光り、やがて泣き出しそうな顔になりました。健康状態がすぐれないのは明らかで、しかも食事も満足していない様子でした。私はやっとのことで自分がリチャードであることを納得させ、外に連れ出しました。彼は、歩行器を使ってもあまりよく歩けませんでした。私は彼

を近くのレストランに連れて行き、少し物を食べさせました。そして、ようやくまともに口がきけるようになった彼の話からわかったのは、金に不自由し、安宿で相部屋暮らしをしているということでした。

「デュース、大切な約束にだいぶ遅れてしまっているんで行かなくちゃいけないけど、また戻って来るよ。」私はそう言って彼を宿に連れて行き、入浴してひげをそるようには言いました。その日、用事を済ませた私は、紳士洋品店で洋服を買い、宿に戻って彼に着替えをさせました。そして車で家に連れて行き、妻のバーナに紹介しました。

私は夕食の席でその日の再会のいきさつを話し、それから妻に私たちの友情のこと、また子供のころデュースとその家族と一緒にいろいろな経験をしたことを話しました。

そのころにはデュースもだいぶ頭がはっきりしてきて、どうして今のような状態に追い込まれたかを話してくれました。痛ましい話でした。

彼にとって双子の兄弟エースを亡くしたことはとても大きな打撃でした。それから何年か後には母親がアルコール中毒で死に、さらに父親が交通事故で帰らぬ人となってしまったとのことでした。商業画家として働いていた彼は、そうした苦しみを酒でまぎらすようになり、やがては職を失い、障害者年金で暮らす身となったのでした。この底なしの沼に沈み込んでいくような生活は長い間続きました。私が彼と再会したときは、あらゆる望みを失い、絶望のどん底に落ち込んでしまっていたのです。

彼を宿に送った後で、私はバーナと彼の今の状態について、またこれからどうすればよいかについて夜遅くまで話し合いました。彼が自活できないことは明らかでした。「このままにしておくわけにはいかないわね。」バーナはそう言いました。

「でもどうしたらよいのだろう。」私は言いました。

すると妻はこう言いました。「ほかにどうしようもないければ、ここに連れて来ないといけないでしょうね。」

翌日、仕事をしていてもデュースのことが頭から離れませんでした。午後、私は彼を捜しに出かけました。彼は私の招きに戸惑ったようでしたが、私の家族と住むことを承知してくれました。私たちは彼のわずかばかりの持ち物をまとめて、家に向かいました。



デュースは私たちの家族の一員でしたが、幸福を祈りつつ彼を新しい家庭へと送り出し、それから手紙や訪問を通して連絡を取り続けることを約束しました。

私たちの家族にとっては大きな決断でした。部屋がないという理由からではありません。妻や子供たちにとって見知らぬ男性と一緒に暮らすことは、たとえその人が危害を加えないことがわかっていても、ぎこちないものでした。事実、彼の姿は哀れそのものでした。歩行器を使っていて、しかも寝室が地下にあったので、日に何度かの階段の昇り降りは、大きな負担でした。

私の家族はデュースをすぐに受け入れました。栄養のある食事、休息、話し相手、そして愛。デュースは次第に立ち直っていきました。子供たちはデュースのやさしくて物わがりのいいところが特に気に入ったようでした。でも、長年にわたるアルコール依存症は、なかなか克服できるものではありませんでした。それに体が不自由で普通の動きができませんでしたから、回復はなかなか大変で、完全に立ち直ることは無理な話でした。最初の月はただ生活を良い方向に変えようと努力することだけでも十分でした。時折、彼は子供や妻の家事を手伝っていましたが、よろよろして頼りになりませんでした。

デュースはたびたび酒を欲しがりました。しかし、バーナと私はそれをきっぱり断りました。自分で手に入れる方法はまったくありませんでしたので、酒が断たれると、彼は体をぶるぶる震わせながら冷や汗を流しました。しかし、そのような方法ですですに体内にたまっている以上のアルコールを取らないようにしているうちに、やがて彼は次第に自分を制御できるようになりました。

体が回復するにつれて、デュースはただぼんやりしていられなくなり、再び自分の才能に挑戦したいと思うようになりました。そこで私は、彼のためにキャンバスを置けるだけでなく、まだふらついている体を支えることのできる頑丈な画架を作りました。

もう長いこと絵から遠ざかっていたデュースは、初め思ったように筆が運ばず、いらいらしていました。しかし、やがて以前の勘を取り戻し、妻に感謝のしるしとして海の絵を描いてくれました。それから、作品がどんどん生まれました。そこで私は何点か売る手伝いをしましたが、彼の技能が完全に前のレベルまで戻ることはありませんでした。

このようにして、彼は私たちの家族の一員となりまし

た。それまで宗教には縁遠い彼でしたが、私たちと一緒に教会に出席し始めました。バーナと私は結婚してから改宗したので、デュースは私のあまりの変わりように驚いていました。それから彼は宣教師と会い、バプテスマを受けました。教会のいろいろな教義、特にどこも欠けることのない健康な体をもって復活すること、そして家族と再会できることは、彼にとって大きな喜びとなりました。

さて、彼は新しい信仰から刺激を受けて、新たな経験を楽しんでいるようでしたが、一方では自分が私たちの家族にとって負担になっているのではないかと思うようになりました。でも不自由な体では、完全に自立することができないのは明らかでした。

第2の奇跡的な再会があったのはこのころです。ワシントン州のシアトルにある私の家から約400キロ離れたオレゴン州のポートランドに出張したときのことです。私はそれまで泊まったことのないホテルに泊まりました。驚いたことに、私の荷物を運んでくれたのが、行方不明で死んだとばかり思っていた、デュースの双子の兄弟エースだったのです。

エースは旧友と出会ったことで、しかも自分の兄弟の消息を知って、たとえようもなく喜びました。そしてデュースとエースの再会の間もなく設けられ、離婚して独りで住んでいたエースがデュースを引き取るようになったのです。

デュースは虚弱な体質と長年の飲酒のために、長寿を全うすることなくこの世を去りましたが、最後まで私たち家族は彼を「デュースおじさん」と呼んでずっと親しく交流を続けました。若くして亡くなったデュースでしたが、彼は福音を見だし、多くの人たちとの実りある永遠の友情をはぐくむことができたのです。□

\*リチャード・W・カータック兄弟：ワシントン州シアトル・ショアラインステーク部シアトル第16ワード部で監督を務め、1988年8月5日に死去した。

# 私のフライトバッグに入れるもの

マイケル・J・アブドー

**飛**行機を輸送するのは珍しい仕事です。ときには通常は着陸しないような場所にも降りることがあります。ブラジルのレシフェを離陸したときもそうでした。単発の小型機でアフリカのコートジボアールのアビジャンに向けて飛んでいたところ、強い乱気流に遭い通常のコースから外れてしまいました。コンパスのほか航法支援装置がないにもかかわらず、無事着陸できたのは主のみ守りがあつたおかげだと感謝しました。ところが驚いたことに、着陸したのはコースを1,200キロも外れたガンビアのバンジュール近くだったのです。



飛行機が強風のために不時着した地点で、私はモルモン経を紹介するすばらしい伝道の機会に恵まれました。



17時間もの長い飛行で疲れていたのと、翌朝早く出発しなくてはならなかったために、非常用に持参していたテントを張って空港で一夜を過ごすことにしました。暖かいアフリカの夜でした。テントを張り始めて間もなく、見回りの整備員がやって来て言いました。「私のところで休みませんか。」「いいえ結構です。お仕事の邪魔になりますから」と私が答えると、整備員は「私のほかにはだれもいないし、私もそのうち寝てしまいますよ。それよりここはヘビが出て危ないんです」と言いました。私は「平気ですよ。たぶんテントの中には入って来ないでしょう」と言いました。すると整備員は淡々とした口調でこう言うのです。「2日前の晩、コブラに目をやられた人がいましてね。きっと失明したでしょうね。」

それを聞いて私はテントをたたみ、整備員について行きました。整備員は私を客のように歓迎してくれ、長い机を指して、そこに寝てくださいと言いました。そして私が快適そうにしているのに満足すると、見回りに出かけて行きました。私は電気を消しました。

数分後、私はその日聖典を読んでいないのに気付き、起き上がって電気をつけました。そしてフライトバッグからモルモン経を取り出してニーファイ第三書から読み始めました。復活したキリストがニーファイの民を訪れる話に没頭していると、先程の整備員が部屋へ入って来て、私が本を読んでいるのを見ると、祈りと瞑想めいそうの邪魔をしたとしきりに謝りました。

私は少しも邪魔ではないと言いかけてましたが、突然こう尋ねました。「モルモン経を見たことがありますか。」整備員はないと答えました。しかし彼はガンビアでは少数派のクリスチャンで、熱心に聖書を学んでいたのです。モルモン経を開いてこの新しい友人と一緒に主のみ言葉を読むことができたのは、なんとすばらしい経験だったことでしょう。私はモルモン経がキリストのもうひとつの聖なる証であると説明しました。

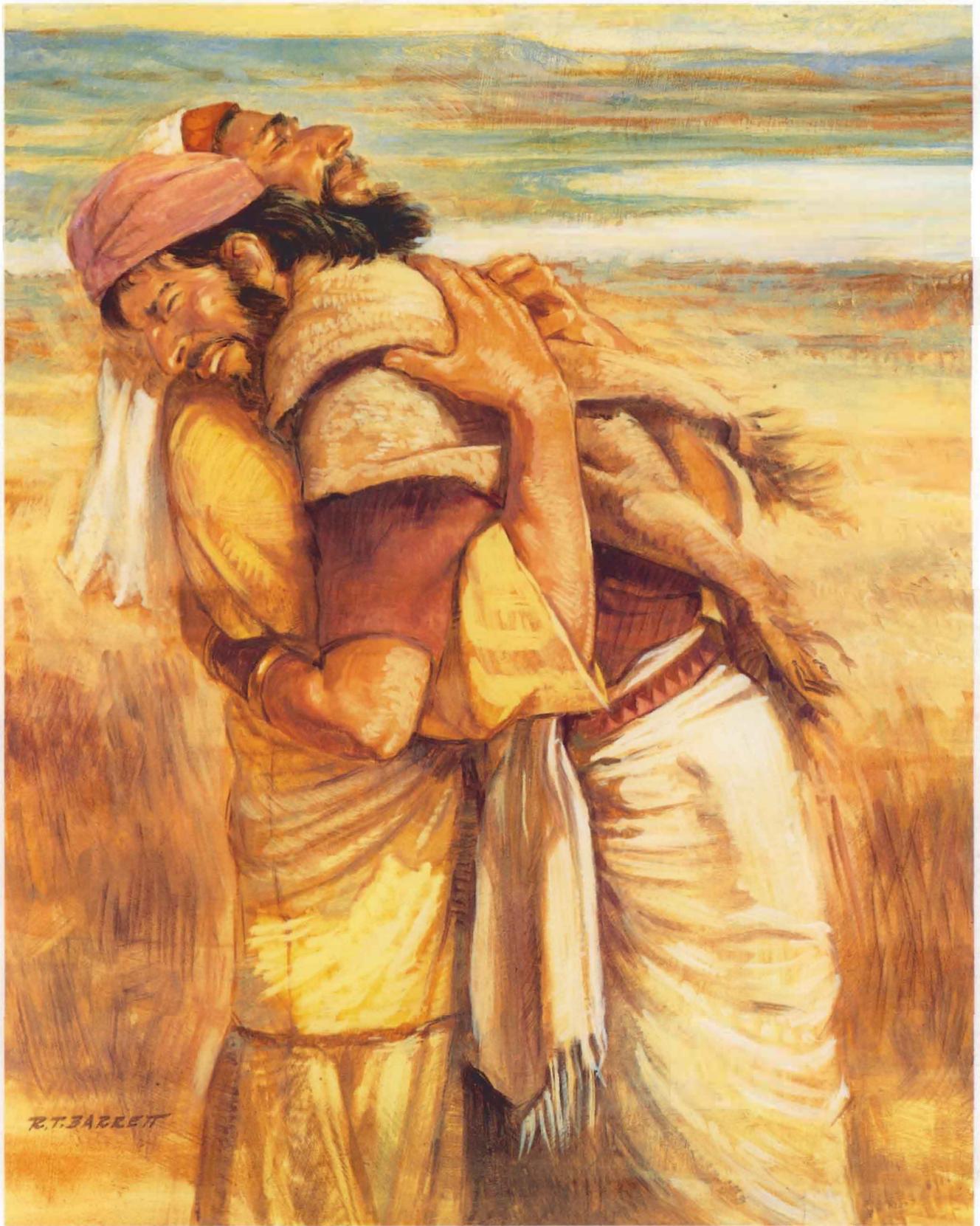
私たちは30分以上話し込みました。ジョセフ・スミスの最初の示現や教会の歴史、教義と聖約や高価なる真珠の意義についても少し話しました。立ち去る前に、整備員はモルモン経とパンフレットを何冊かぜひ手に入りたいと言いました。私は後で送る約束をして、彼の住所を控えました。

翌朝早く、私は彼には会わずにアビジャンを目指して出発しました。家に帰るとすぐ、モルモン経とパンフレットを送りました。返事が来るかどうかわかりませんが、いずれにせよ、地球上の遠い片隅でわずかながらも福音を広める手助けができて、感謝しています。現在、私のフライトバッグは飛行用品でいっぱいですが、必ずモルモン経とパンフレットを入れるようにしています。この次伝道の機会が訪れたときには、準備はできています。

□

\*マイケル・J・アブドー兄弟：ユタ州セントジョージ東ステーク部セントジョージ第9ワード部所属。





「抱擁するヤコブとエサウ」ロバート・T・バレット画

「さてヤコブは目をあげ、エサウが四百人を率いて来るのを見た。そこで……みすから〔ヤコブの家族〕の前進み……兄に近づいた。するとエサウは走ってきて迎え、彼を抱き、そのくびをかかえて口づけし、共に泣いた。」(創世33：1-4)



**ア**ンデス高地で末日聖徒の青少年はベンソンクラブ  
のメンバーとして運動能力を伸ばし、バスケットボ  
ールやバレーボールを通して教会の発展に尽くしている。  
(p.10参照)

# 子供に対する 親の特別な責任

アジア地域会長会第二副会長  
マーリン・R・リバート

『神の子です』という賛美歌があります。これは初めは子供たちの歌でしたが、すぐに成人の集会でも愛唱されるようになりました。おそらくその歌詞が私たちの心情に訴える力を持っているからでしょう。天父との永遠の結び付きに関する教義上の基本的な原則がその中に盛り込まれているからです。

1. 神の子です、私やあなた  
あふれる恵みに感謝します  
(折り返し)  
私を助けて導いて  
いつかみもとへ行けるように
2. 神の子です、私やあなた  
み言葉正しくわかるように
3. 神の子です、私やあなた  
みこころ行ない、また天に住む  
(賛美歌189番)

私はこの賛美歌の中に歌われている真理、すなわちすべての人は永遠の父なる神の霊の子供であるという知識に感謝しています。私たちは皆、この地上に誕生し、生を受けました。どの幼な子も、愛にあふれた両親に見守られ導きを受けられるように天父は意図されました。最初の両親であるアダムとイヴがその模範を示しました。ダビデの子孫であったヨセフは、マリヤが天使ガブリエルの訪れを受けた後、彼女を妻に迎え、天父に代わって主イエス・キリストの父親の役割を引き受けました。ナザレではイエスの父はヨセフと見なされていたのです。(マタイ13:55参照)

ヨセフは子供の世話をよくする正しい父親であり、夫でした。東方の博士たちの訪問を受けた後、主のみ使いが夢でヨセフに現われ、マリヤと幼な子イエスを連れて安全なエジプトの地へ逃れるように指示を与えました。ヘロデ王が幼な子を殺害しようとしていたからです。ヘロデが死ぬと、み使いが

再び夢で彼に現われ、家族と共にイスラエルの地に戻っても安全であることを告げました。(マタイ1章参照)

ここで重要なのは、天父がご自分の代理として父親の役を務めるヨセフを尊重しておられるという点です。ヨセフは家族を安全を守るために、天からの指示を受けられるだけのふさわしい生活を送っていました。

幼な子キリストはこのつつましい家庭で成長しました。ヨセフは大工としての収入でつましく生計を立て、イエスご自身もこの家庭で大工の技術を身に付けられました。(マルコ6:3参照)家庭にはイエスのほかにも子供たちがいました。ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ、それに何人かの名前を知られていない少女たちが、その辺りではイエスの弟や妹として知られていました。(マタイ13:55-56;マルコ6:3参照)ヨセフとマリヤはみずから模範を示し、家族のために好ましい家庭を築いていたので、「すべての事を初めから詳しく調べて」いたルカ(ルカ1:3)は、イエスは「ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」と述べています。(ルカ2:40)

確かにイエスは特別な使命を持っておられ、神から受け継いだその特質のために、明らかに、普通の人には享受できないすぐれた点を持っておられました。それでも私たちは、親として家族を守り育てたヨセフとマリヤの謙遜な模範から、多くを学ぶことができます。彼らの築いた家庭は、大工としての収入で大人数の家族を養わなければならない、つつましく貧しいものだったに違いありません。

主は幼い子供たちに特別な保護を加えられました。サタンは「幼き小児ら……を試むる」力を与えられていません。したがって、幼い子供たちは責任

の取れる年齢に達するまで罪を犯すことができません。主はその年齢を8歳と言われました。(教義と聖約29:47;18:42参照)これは時の初めから神の計画の中でも大切な事柄でした。

「<sup>おきなご</sup>幼児は罪を犯すこと [ができない]」(モロナイ8:8)からです。子供たちは罪を犯すことができないので、「悔改めもバプテスマも一切不要」です。(モロナイ8:11)モルモン経の予言者は、アダムの<sup>とが</sup>咎の結果はイエス・キリストによって幼い子供たちから取り除かれていて、彼らには何の影響もないと教えました。(モロナイ8:8参照)さらに、幼い子供にバプテスマを施す慣行は「神を嘲弄しているだけ」であると語りました。悔い改めとバプテスマはいずれも「罪を犯すことができ罪の責任を負うことができる者」のためにあるからです。(モロナイ8:9-10)幼い子供たちは「……世の始めからすでにキリストにより救われている。もしもそうでなければ神は不公平な神であり、変ることも人をかたよって見ることもある神である。なぜならば、バプテスマを受けないで死んだ幼児の数はいかにも多いではないか」(モロナイ8:12)と記されています。また、予言者はこうも述べています。「この幼児はバプテスマを受けたから神に救われるが、あの幼児はバプテスマを受けないから必ず亡びると思うことは<sup>はなはだ</sup>甚しく恐ろしい悪事である。」(モロナイ8:15)なぜなら幼い子供たちは悔い改めることができないからです。そうでなければ、「神の純粋な恵みを幼児[は]受けない」でしょう。「幼児はみな神の深い憐みによって救われている」(モロナイ8:19)のです。

キリストは「すべての幼児は私の目に等しく見える」と教え、さらに「私は完全な愛で幼児を愛する。幼児はみな等しく救われている」と言われました。(モロナイ8:17。教義と聖約29:46-50;モロナイ8:22参照)モーサヤ書には「まだ年の行かない中に死ぬ幼児は亡びない」と記されています。(モーサヤ3:18)

責任を取れる年齢に達する以前の子供たちはすべて清く汚れない状態にあって、まったく罪がありませんから、日の光栄の王国に救われます。(日の光栄の王国に関する示現1:10参照)

子供たちは本質的に清く汚れないという、神のみ前における彼らの特別な状態について理解すると、罪を犯し得る人々に与えられた主の次の戒めが深い意味を持つようになります。「悔い改めて幼児のごとくになり、わが名によりてバプテスマを受けざるべからず。」(IIIニーフアイ11:37)また、神の予言者は次のように警告しています。

「おとながへりくだって幼児のようにな[ら]……なかったならば、その人は身も霊も救いを受けることができない。」(モーサヤ3:18)主が言われた幼な子のような特質は「聖霊の導きに従」うことによって培われ、「……従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従」できるようにになります。モーサヤ書の教えによれば、そのような人だけが本当に「キリストの身代りの贖罪しよぐいに由って聖徒」になるのです。(モーサヤ3:19)

シオンの両親は、子供たちを正しく教え育てるという特別な責任を与えられています。主は彼らに「八才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマとあしめによる聖霊の賜などの教義を教えて理解」させるように命じられました。この責任を怠れば、「罪その両親の頭こうべに留とどまる」と主は宣言しておられます。(教義と聖約68:25)子供が責任を取れる年齢に達する以前、つまりサタンが誘惑する力を持たないために子供に罪や汚れない時期にそのような教育を行なうことが大切です。子供が汚れなく、罪のない状態にあるこの時期は、両親がサタンの妨害を受けずに救いの原則と儀式を教えることのできる、本当の意味での自由な期間なのです。子供たちが悪魔の力まんろうに翻弄されないうちにこれらの事柄を理解しておくのは、きわめて大切です。主イエス・キリストへの信仰を持たず、福音の基本的な原則も知らないままで子供たちの人生のこの最も純粋な時期を無為にやり過ごしてしまうことは、邪悪な世界という荒海にかじを持たないまま送り出すのと同じです。子供はこの罪のない成長期にも悪い行ないをすることがあるかもしれませんが、それはサタンのせいではありません。サタンには子供を誘惑したり誤った方向に

導いたりする力はないからです。そうではなく、ほかの人の悪い行ないを見てそうするのは、子供は良い模範に従うのは言うまでもなく、悪い行ないをもまねるものです。この理解の上に立てば、人を罪に誘惑することについて主が厳しい裁きを下されたことも、一層よく理解できるようになります。

「これらの小さい者のひとりをして罪に誘惑するよりは、むしろ、ひきうすを首にかけられて海に投げ入れられた方が、ましである。」(ルカ17:2)

両親は、正義と救いの原則ならびに主を愛することを子供たちに教えるよう常に戒められてきました。主はイスラエルの民に次のように命じられました。

「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。」(申命6:7。モーセ6:57-58参照)

モルモン経の予言者も神の戒めに従って子供たちに福音の原則を教えるよう民に勧告を与えたことが記されています。(モーサヤ1:4参照)

現代の予言者たちもこの大切な教えを繰り返して語っています。今世紀に入ってから、定期的に家族を集めて神の戒めに従い子供たちに福音の原則を教えるよう私たちに指示を与えました。どの子供もイエスと同じように、福音の教えを受けながら成長できる整った環境、すなわち「ますます[霊が]成長して強くなり」、知恵に満ちた生活を送れるような家庭で育つ権利があります。そうすれば「神の恵み」がこの幼く貴い子供たちに注がれて、罪のない清らかなその様子は私たちの目には天使のように映るでしょう。

子供たちを教えるというこの責任を果たすには、社会的地位や富などは関係ありません。むしろ、質素な環境の中での家族だんらんのひとつときこそ最も効果的な教育の場と言えるでしょう。中には、まだ年端のいかない未熟な子供たちには福音の原則は理解できないと言いついて、この大切な戒めを実行していない人がいます。しかし、子供たちに福音を教えるという戒めを実行している親たちは、違った理解の仕方を行っています。最近、3歳になるある子供が朝食の席で両親にこう尋ねまし

た。「パパは神様なの?」「違うよ、テイラー。どうしてそう思ったんだい。」子供らしい無邪気な信仰と論理で、テイラー君はこう答えました。「だって、『神の子です、わたしやあなた』って歌うでしょ。」それは両親や初等協会の教師たちから教えられた真理だったので。

ところで福音の原則を理解させるには、普通は、口で教えるだけでは十分とは言えません。ほかのすべての場合と同様、実生活の中で福音の原則を実践して見せる方が、ずっと確実にこの大切な義務を果たせると言えます。

「模範は人類の学校である。人はそれ以外の場所で学ぶことはない」とエドモンド・パーク(1729-97、イギリスの政治家・著述家)は言っています。(「パートレット名言辞典」p.114)もし両親が福音の原則を本当に子供たちの心に植え付けたいと望むなら、親自身がそれらの原則を生活の中で実践していなければなりません。

現代のある学者は次のように述べていますが、まさに当を得た指摘と言えるでしょう。

「今日の最大の問題とその解決策は家庭にあります。すべての男女に向けた使徒パウロの教えは家庭における模範、教育と訓練を重視しています。これは両親が協力して行なう務めです。現代社会の最大の問題は、親がその指導力を放棄しているために子供たちがなおざりにされていることです。その結果、若人たちは至る所でマスメディアや利潤の追求だけを目的とする娯楽によってすっかり毒されているのです。」(リチャード・ロイド・アンダーソン「パウロを理解する」p.354)

私自身も両親の教えに感謝しています。私の両親はみずからの手をもって正直に働き、質素な生活ながらも大勢の子供を育てました。それにもかかわらずいつも明るく、家族に教えたことを実践し、福音の原則に対して疑念を抱かせたり、信仰を失わせたりするような言動は何ひとつしませんでした。

皆さんと同じように私自身も神の子であり、回復されたイエス・キリストの福音は「いつかみもとへ行けるように」必要なすべてのことを教えてくれます。私もこの知識を与えられたことを喜んでいきます。

## ヨルダン王妃, 180人の教会員を 宮殿のレセプションで歓迎

ヨルダン王国のノーア妃殿下は、先ごろ180人の教会員を迎えて開かれた宮殿でのレセプションに出席された。

この特別な機会にあずかったのは、ブリガム・ヤング大学のエルサレム・センターの学生である。「妃殿下は2時間もの間、学生や教職員、アーマン支部の会員と握手をしたり、言葉をかけたりしてくださいました。本当に寛大で心のやさしい方です。」こう語る

のはヨルダンにある教会の文化教育センター所長バーノン・J・ティプトン兄弟である。

一行は翌日の夕方、王室警備隊総司令官エル・フェイエス將軍の別宅の庭で、伝統的なアラブ料理のもてなしを受けた。

ブリガム・ヤング大学の一行と共にヨルダン議会議員のモハメド・カマル氏が同行したが、この訪問が実現の運びとなったのは、元駐米ヨルダン大使

であるカマル議員の取り計らいによるものである。

1989年にヨルダン政府は教会の文化教育センターの登録を承認した。

(「チャーチニュース」1990年7月23日付)



ブリガム・ヤング大学エルサレム・センターの学生、ヨルダン宮殿を訪問。バリー・マクドナルド、ピッキー夫妻に声をかけられるノーア妃殿下(左)

## 末日聖徒の長老を描いた クック諸島の切手発行

クック諸島政府が発行した多色刷り郵便切手シリーズ「クック諸島の宗教」の4つの教会のひとつに、末日聖徒イエス・キリスト教会が採り上げられた。そのほかの宗派は、ロンドン宣教教会、カトリック、セブンスデー・アドベンティスト教団である。

この4枚の切手シートの中で、末日聖徒イエス・キリスト教会は向かって左下に印刷されており、切手の周囲には、キリストが使徒に与えた次の言葉が書かれている。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子と

して……教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:19-20)

末日聖徒イエス・キリスト教会の切手は、前景にオズボーン・J・P・ウィットソー長老の肖像画、背景に教会堂が描かれている。ウィットソー長老と同僚のマービン・デービス長老は、クック諸島最初の末日聖徒の宣教師として1899年5月23日にラロトンガ島に到着した。

クック諸島は南太平洋上にあり、ニュージーランドの北東約3,000キロに位置し、ニュージーランド・オークランド伝道部の管轄下にある。この切手シリーズは、2月に発行されて以来、熱心な収集家をはじめ一般の人々からも好評を得ている。「切手は大きな反響を呼んでいて、島を訪れる旅行者はこの切手を買って手紙を出したり、おみやげにしたりしています。」そう語るのはトレパー・C・ハモン副伝道部

クック諸島の切手に描かれたウィットソー長老と同僚は1899年に島に到着した。

長の妻マーリーン・ハモン姉妹である。

この切手の発案者はセブンスデー・アドベンティスト教団の牧師である。宗教諮問協議会の会長を務めるこの牧師は、1985年に協議会に属するそれぞれの教会の最初の教会堂と宣教師を描いた切手を作ることを発案した。協議会はこの案をクック諸島切手収集局長ジェームズ・リトル氏を通してクック諸島政府に提議した。

切手は今年2月19日に発行され、3月には4つの教会の各指導者に贈与された。贈呈式の当日、教会の責任のためほかの島を訪問していたハモン副伝道部長に代わり、ハモン姉妹が式に出席した。各教会の代表はラロトンガにあるアバルアでジェフリー・ヘンリー首相と会談した。

切手は1シート12枚で、4つの教会が載っているシートと、各々の教会のみのシートが購入できる。希望者は1シートにつき2.25U.S.ドルまたは4.10ニュージーランドドルを同封のうえ、下記へ申し込む。

Philatelic Bureau  
Post Office  
Rarotonga, Cook Islands  
South Pacific

(「チャーチニュース」1990年7月23日付)



# 中国旅行の「切符」 となった古い写真

## 末日聖徒の夫婦、中国親善旅行に招待される



中国人民对外友好協会の招きによる中国旅行中に誕生日を迎えた  
テイラー長老。(中央)

**45**年前、中国で撮った1枚の写真がきっかけとなって、ユタ州プロボ出身のウィリアム・テイラー兄弟とバーバラ姉妹は、5月3日から20日まで中華人民共和国を旅行することになった。

テイラー夫妻はやや遠回りして、アイルランド経由で中国に到着した。というのは、夫妻は昨年の8月からアイルランド・ダブリン伝道部で奉仕していたからである。

テイラー長老と姉妹はアイルランドのプレーで、ある中国人夫妻と知り合った。その夫妻との会話の中で、テイラー長老は、第二次世界大戦の終戦間近に中国で経験した思い出について語った。

彼は太平洋上のウェーク島で非戦闘員として働いていたが、1941年に日本軍の捕虜となった。ほかの捕虜たちと共に中国の上海へ送られ、日本軍の捕虜収容所に1945年の5月まで収容されていたが、列車で移動させられる途中、脱走に成功した。中国共産軍の分隊が彼を見つけ、また日本軍に拉致されることのないようにと、中国北部での会戦に3カ月間同行させた。そしてこの中国人兵士たちは、ついにアメリカ部

隊と無線連絡を取り、アメリカ人の非戦闘員を迎えに来てほしいと伝えた。こうしてテイラー長老はアメリカ軍の爆撃機で延安へ行き、そこで毛沢東中国共産党主席と朱徳軍総司令官に会った。写真はそのとき毛沢東首席と並んで撮ったものである。

テイラー長老がこの経験について語ると、アイルランドで会ったこの中国人夫妻はとても興味を持ち、そのときの写真を見せてほしいと頼んだ。翌日、長老が彼らに写真を見せると、夫人は写真の写しをもらえないかと尋ねた。長老は彼女の意図がよくわからなかったものの、持っていたもう一枚の写真を彼女に渡した。

夫人はその写真を携えて北京に戻った。政府の閣僚である彼女の父親を通して、その写真は元駐米大使、韓叙氏の手に渡った。韓氏はみずから会長を務める中国人民对外友好協会の賓客としてテイラー夫妻を中国に招待した。

テイラー夫妻は、伝道部を離れる許可を受け、宣教師としてではなく、中国人民对外友好協会の賓客として中国を訪問した。

17日間の滞在中、テイラー夫妻は北京の人民大会堂で政府高官に会った。

また、北京、上海、重慶、西安、および延安で彼らのために晩餐会が開かれた。

さらに数々の有名な史跡に案内され、万里の長城、北京の紫禁城や明朝の十三陵、重慶近郊の洞窟画、2,000年の歴史を持ち、世界の七不思議にも匹敵すると見なされている西安郊外の秦始皇帝兵馬俑坑などを訪ねた。

「私たちににとって一番印象的だったことは、農民、商人、政府官僚など多くの人々に会えたこと、そして彼らの愛とやさしさを感じられたことです」とテイラー長老は語った。「これまで数十年間ずっと忘れることのできなかった思い出とまったく同じ経験でした。日本軍から逃れた後、中国人は私にとっても親切にしてくれたのです。」

テイラー夫妻を招いた人たちは、5月18日がテイラー長老の73歳の誕生日であることを知り、北京にある元蔣介石邸宅でひそかにパーティーを計画した。パーティーを主催したのはエジプト、カナダおよび国連の大使を務めたことのある黄華氏と夫人である。招待客の中には雑誌「今日中国」社の社長である孟芝清氏、北京大学学長の呉淑清氏、中国人民对外友好協会書記長の張学良夫人、および協会からテイラー夫妻の旅行案内役として派遣された周立清氏らがいた。

テイラー長老と姉妹は、ユタ州プロボのシャロン東ステーキ部プレゼントビュー第5ワード部出身であり、昨年8月にアイルランドのダブリン伝道部に召された。中国旅行を終えたふたりは、再び伝道部に戻り、召しを果たしている。（「チャーチニュース」1990年7月7日付）

1945年に毛沢東主席と並んで撮ったウィリアム・テイラー兄弟の写真が中国訪問のきっかけとなった。



## 再組織された 札幌ステークス部長会



去る7月15日に開かれた札幌ステークス部長会で、1987年11月からステークス部長の責任を果たしてこられた西田孝雄兄弟が解任され、新たに鮫島邦彦兄弟(写真中央)が召されました。第一副ステークス部長には横山正兄弟(写真左)が、第二副ステークス部長には引き続き中島克己兄弟(写真右)が召されその任に当たります。

### 天からのサイン

札幌ステークス部長会  
ステークス部長  
鮫島 邦彦

**末**日聖徒イエス・キリスト教会の会員となって30年以上がたちました。自分のこれまでの人生の半分以上を教会員として過ごしたことになります。これまで与えられた責任は何か果たし、集会にもほとんど休まず出席してきました。外見からは、立派にすべての責任を果たしているように見えるかもしれませんが、しかし、実情はというと、始終、優柔不断な心の動きがあります。

かつて、受けていた責任の重大さと疲れから、それから逃れたいと考えていた時に、急に1年間カナダに派遣されることになりました。1年後に帰国することがわかっていたのでその責任は解任されなかったのですが、見知らぬ所でのんびりと大いに楽しめると、ほっとした気持ちで家族と一緒にエド

モントンに向かったのです。

知人はひとりもない初めての所で、互いに論文上でしか知らない同僚と空港で初対面のあいさつをし、車に乗って5分もしないうちに、彼から「あなたは末日聖徒ですか」と尋ねられました。びっくりして、なぜそれがわかったかと聞きますと、自分の親友に末日聖徒イエス・キリスト教会の熱心な会員がいて、雰囲気似ているからだということでした。オフィスに着くと、同僚は友人に直ちに電話し、日本から教会員が来ていることを伝えました。その友人はエドモントンステークス部の副ステークス部長でした。

不思議なことは次々と起こりました。同僚が私のために借りてくれていた部屋に行くと、大家さんが旅行中のため、そのお姉さんに会いました。彼女は私にひとつの条件を出しました。「たばこを部屋で吸わないこと」でした。住む所も決まり、身の回りの必要な物を買そろえるために早速買い物に出ると、歩いて1、2分の所に末日聖徒イエス・キリスト教会の集会所があります。3日後の安息日にやれやれといった気持ちで教会の集会に出席してみると、大家さんのお姉さんがいるではありませんか。大家さんの家族をはじめ、彼女の3人の姉妹の家族は皆教会員だったのです。神権会では、アメリカのアラバマで伝道部長をして、帰還したばかりの兄弟が熱心に話しかけ、いろいろと親切にしてくれました。神権会が終わると、突然、後ろから「おはようございます」と日本語で話しかけられました。昭和34、5年ごろ、おもに日本の関西地方で伝道した副監督の兄弟でした。

見知らぬ所で、少しのんびりしようというもくろみは、日本を離れて1週間もしないうちに簡単に消えてしまいました。天の父なる神様は、私たちの心の内をすべてお見通して、必要な時

に、必要な方法で、主の道を歩むためのサインをお示しになることを証します。大切なのは、主なる神様から絶えず示されているサインをどのように感じ、受け入れるかにあるのではないかと思います。

部屋を2カ月間貸してくれた大家さんご夫妻はやがて定年を迎え、ふたりでインドに宣教師として伝道に出られました。副監督のご長男も2年前に北海道での伝道を終え、無事帰還されました。アルバータ神殿のあるカードストンの地名の由来となった初期の開拓者、カードの子孫で、アルバータ大学の社会心理学教授の兄弟(現名誉教授)と姉妹、香港から移住してきた家族やそのほか多くの教会員が親切にしてくれました。私たち家族がカナダで過ごした期間は短く、人生のほんの一瞬間でしかありませんが、これらの人々とは長い交際が続いています。

仕事であちこち出かける機会がありますが、どこにいても末日聖徒はお互いによくわかり、初対面でも、あたかも長年の親友であるかのように喜びと平安を感じることが出来ます。これは、私たちが霊の存在であった時に天の御父のみ前で互いによく知り合っていた証でもあり、同時に福音が真実であることの証明でもあると考えています。

ときどき訪れる神殿で、各地から集まる聖徒と会うのも楽しくうれしいものですが、中でも、長年にわたって主への忠実さを表わしている古い友人に会うときに、あいさつの握手をするだけで、自分の証が強められ、福音に生きる楽しさと勇気を奮い起こされるのは実にありがたいことだと思っています。これからもいろいろなことがあるでしょうが、この長く続く喜びと楽しさを忘れないで、教会の召しを果たす努力をしたいと決心しています。(さめじま・くにひこ 1938年生まれ)



鮫島邦彦兄弟とご家族

# 「すべては善し」

大阪ステーク部東大阪ワード部

末武寛子



**昭**和34年5月16日、私は修正大血管転位症、心室中隔欠損症、肺動脈狭窄症、動脈管開存症という重い心臓障害を持ってこの地上に生まれて来ました。以来、家族にとっては私を生かすことだけが生活のすべてになりました。父は治療できる医者や病院を見つけるために家や土地を売り、富山の田舎から大阪へ移って来ました。まだ小さかった私は自分のハンディを知らずに過ごしていましたが、大きくなるにつれて、人と違うことを知らされていきました。歩くこと、外で遊ぶこと、跳んだりはねたりすることなど友達が普通にしていることが、私には別世界のことのように思えました。

小学校に入るころ、学校の近くに引っ越しました。それでも学校まで50メートルという距離は、ほとんど歩けない私にとって大変な苦難でした。かばんも持ってません。教室も学校側の配慮で1階ばかりを使いました。そんな中でひとりの友達ができました。彼女は出会ったときからずっと私を助けてくれ、6年間毎日、どんな日にも重いかばんを自分の分と私の分とふたつ持って通ってくれました。ふたりはいつも一緒でした。何度かあったクラス替えのときも彼女が必要だということで、

私たちは離されることはありませんでした。

小学校6年生のとき「もうこの子は生きられない」と言われ、少しでも生きられるようにと血管を広げる手術をしました。たくさんの友達の祈りの中で手術は成功し、普通の生活ができるようになりました。歩けることが奇跡のように思えました。

それからその親友とはいつも一緒でした。ところが成人して22歳の夏、彼女は交通事故で亡くなりました。信じられませんでした。あの元気で明るく、いつもそばにいてくれた彼女が先に逝くなんて……。その悲しみは主を知るまで癒えることはありませんでした。彼女は神様から送られた天使でした。

1984年にバプテスマを受けた私はずっと聞きたかったことを天父に祈り、尋ねました。「神様、どうして負いきれないほどの重荷とともに私を送られたのですか。」普通の人のように健康に生まれ、思いきり遊べて、スポーツができ、結婚して、子供を持って……。なぜ私は生きることだけを望みとしなければならないのか、そんな自分が哀れでなりません。けれども答えは心の中にはっきりと与えられました。私自身がそれを選んだのだと。どんな苦しみを与えられても神様のようになること、天父のもとで永遠に生きることがどれほどの幸福か、前世での私はそれを知っていたということが理解できました。「富を求めずして智慧を求めよ。さらば見よ、神の奥義は開かれ、それより汝ら富める者とせらるべし。見よ、永遠の生命を有つ者は富めるなり。」(教義と聖約6:7)

今年の3月、私は胸の痛みのために病院へ行き、心不全と告げられました。

ショックでした。心臓が弱っていて、いつ止まるかわからない状態だということでした。余命を1日でも延ばすためには強心剤を使うしかないと言われました。12歳のとき、「この子は成人するまで生きないだろう」と言われたことを忘れたかのように、10年も長く神様に生命をいただき、30歳まで生きてきました。その間に福音を知り、自分が永遠の存在であり、復活することなどすべて知識ではわかっていたつもりでした。でも死に対する恐ろしさはとても口では表わしきれません。その日から、夜寝るのも怖くなりました。不規則に打つ自分の心音を聞きながら、止まるんじゃないだろうか、今日を閉じたらもう二度と覚めないんじゃないだろうか、恐ろしさでいっぱいでした。神殿に行き、平安と勇気を求めて祈りました。でもどんなに祈っても平安は与えられません。神様しか頼れないのに……。私に信仰がないから答えてくださらないのかと何度も思いました。絶望でした。

何日かたち、責任のことである神権者と電話で話をし、悲しさと苦しさに耐えかねて自分の状態を打ち明けました。彼は時間をおいてこう言いました。「命があと1時間であっても、1年であっても、60年であっても同じことですよ。たとえ60年生きても、自分の人生は短かったと思うでしょう。死はだれにも同じようにやって来ます。でもあなたには昇栄したいという望みがあるんですよ。どんなに長く生きてもそのことには代えられないんです。」そしてこう付け加えてくださいました。「姉妹、『すべては善し』なんですよ。」「すべては善し、すべては善し。」心の中で繰り返していると、あつい思いがあふれてきました。涙が止まりませんでした。神様の答えだとはっきり知ることができました。私はそのときからすべてを主にゆだねて生きることにしました。神様は生きておられます。そして確かに「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」ことを証します。家族に感謝します。兄弟姉妹に心から感謝しています。(すえたけ・ひろこ 1959年生まれ、ステーク部初等協会第一副会長)

# 私の改宗

広島ステークス部広島光ワード部

西口貴広



西口貴広兄弟と母親の泉姉妹

1987年4月、大阪の短大を卒業した私は、さらに新潟の大学へ進学しました。私は化学を勉強しており、卒業後は大学院へ進学したいと思っていました。

そんな5月のある日、私は「今すぐカリフォルニアへ行きたい」と感じ、6月に1カ月休学してロサンゼルス近郊でホームステイすることにしました。私のホストファミリーはメソジスト教会に属するとても良い家族でした。でも私はそれ以上に、ある家族に心をひかれました。私たち日本人に英会話を教えてくれていた先生の家族でした。

先生の娘さんのひとりには、5人のかわいい子供がいました。この子供たちを見ていると、とても幸せそうで、何とも言えない平安を感じました。この家族は末日聖徒で、あまり裕福そうではありませんでしたが、特別なものがあり、家族の本来の姿を教えてくれているようでした。私は毎日この家族のところへ遊びに行きました。

そして最後の1週間、私のホストファミリーは旅行をすることになり、私はこの先生の家にお世話になりました。この短い滞在期間に、先生とご家族は、私をロサンゼルス神殿へ連れて行ってくださいました。訪問者センターでは、イエス・キリスト、バプテスマのヨハネ、ジョセフ・スミスなどのすばらしく美

しい絵をたくさん見、日本語のモルモン経をもらいました。

帰国の途に就いた私は、空港で出発を待っていたときネクタイをした4人の青年を見かけ、英語力を試そうと思って声をかけてみました。彼らは名古屋伝道部へ向かう途中の末日聖徒の宣教師でした。その中のひとりが私にモルモン経を渡そうとしましたが、私がすでにモルモン経を持っていたので、彼らは驚いていました。

やがて時間が来て私は飛行機の座席に着きました。東京までは約11時間あります。隣には中年の日本人女性が座っていました。長時間黙っているのが苦手な私は、早速この女性に話しかけてみました。この女性はとてもやさしい人で、私の話をたくさん聞いてくれました。特に将来の夢について話をしたときには「あなたの夢がかなうようにお祈りしてあげましょう」と言ってくれました。話を聞いてみると、この女性も末日聖徒だったのです。彼女は何回も渡米経験があり、このときも友人を訪ねた後、帰国するところでした。東京に着くまで、私はこの女性と楽しく話を続け、成田空港で握手をして別れました。

帰国後、私はモルモン経を本棚にしまい、そのまま1年半が経過しました。1988年12月のことでした。私は実家のある大阪に戻り、宅配便のアルバイトをしていたとき、ある荷物を届けた先が宣教師のアパートでした。私は英語に興味があったので、まず教会の英会話に行きました。そしてレッスンを受けることになりました。

宣教師から話を聞き、モルモン経を読んでいくうちに、「これこそが真理ではないか」と感じるようになりました。特に「人に愛がなければその人は

何ものでもない」(モロナイ7:44)という聖句は心に響きました。私は「自分もモルモンになりたい」と心から思うようになり、1989年1月1日、大阪ステークス部枚方ワード部でバプテスマを受けました。

それから3カ月の間、私は教会員や宣教師と多くの時を過ごすことにより、数々の祝福を受けました。そのひとつは、2月の大阪・名古屋・神戸の地区大会に出席でき、アメリカから帰国するときに会った名古屋伝道部の宣教師に再会できたことです。彼も私も大喜びでした。また、できれば飛行機で会った姉妹とも再会できるように、祈り続けています。

改宗して以来、私は母を何とか教会へ導きたいと思っていました。宣教師はよく家に来てくれ、母とも仲良くなったのですが、母はなかなか安息日の集会には出席しませんでした。4月から広島の大学へ行く予定だった私は、最後の日曜日に母を教会に誘うと、聖餐会に来てくれました。賛美歌を歌っている母を見ると、目から涙がこぼれ落ちていました。

次の日曜日、私は広島から母に電話をしました。すると母は、自分から教会に行き、宣教師からレッスンを受けることになったと言うのです。約3週間後、母はバプテスマを受け、私は言葉では言い表わせないほどの喜びに満たされました。私にとって最も大きな祝福のひとつでした。活発に教会に集う母を見ると、私も安心して広島ので頑張ることができそうです。

今年の1月1日で改宗して1年となり、祝福師の祝福を受けることができました。翌月のステークス部大会では、念願のメルケゼデク神権を受けることができました。教会や福音に対する証も、ますます強まる一方です。1年後には学業を一時中断して伝道に出ようと決意し、準備しているところです。母はもちろんのこと、父も賛成してくれました。これも大きな祝福です。

これからも、すばらしい末日聖徒になれるように、母と共に頑張っています。これらの祝福を心から感謝しています。(にしぐち・たかひろ 1967年生まれ、ワード部独身成人代表)

# 8月に召された専任宣教師 135期生 14人



後列左から1-9, 前列左から10-14

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 今野留理子	仙台S/福島W	東京南伝道部
2. 阿部真子	仙台S/長町W	東京南伝道部
3. 相良なおみ	横浜S/横浜中央W	沖縄伝道部
4. 藤田奈美	広島S/五日市W	仙台伝道部
5. 岡本志保	東京S/三鷹W	大阪伝道部
6. 荻野恵	福知山D/豊岡B	沖縄伝道部
7. 棕沢かずみ	仙台S/上杉W	大阪伝道部
8. 古村和美	岡山S/岡山西W	東京南伝道部
9. 秋田倫江	大阪北S/京都洛南W	沖縄伝道部
10. 坂野巨功	大阪堺S/河内長野B	札幌伝道部
11. 春日晋	BYU1stS/51stW	岡山伝道部
12. 長谷川哲也	東京南S/大岡山W	岡山伝道部
13. 芦田延之	横浜S/小杉B	沖縄伝道部
14. 阿部善光	秋田D/酒田B	大阪伝道部

S:ステーキ部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

## 新役員の任命

1990年7月20日から1990年8月21日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 東京東ステーキ部牛久ワード部  
新監督:鈴木徳雄  
(前任者:佐藤正温)
- 東京西ステーキ部八王子第1ワード部  
新監督:小俣孝  
(前任者:品川文弘)
- 北陸地方部小松支部  
新支部長:竹内章浩  
(前任者:山野武幸)
- 鹿児島地方部鹿児島支部  
新支部長:国生敬  
(前任者:山口薫)

編集室から

### 皆さんの原稿を募集 しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など),本誌を読まれての感想文などをお送りください。

▶ワード部/支部特集への投稿を希望される方は,編集室へ直接お電話ください。必要な資料をお送りいたします。

▶1991年1月号掲載分の締切は10月31日です。なお,投稿の際,必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名),生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また,掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先:〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室

☎03(444)5264